

BIOHAZARD~悲劇のエージェント~

特殊作戦群

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1998年9月にラクーンシティにおいて起きた悲劇の事件、後にラクーンシティ事件と呼ばれる惨劇で一人の日本人が表舞台から強制的に抹消された。彼は日本人としてではなくアメリカ人として生きていくことを強要されてしまったのだ。二度と祖国の土は踏めないかもしれない。．．．そんな不安を抱え彼は今日も銃を握る。．．。

目次

プロローグ

プロローグ その日俺は死んだ

1

あれから数年

優希の現在

オペレーション・ハヴィエ編

ファースト・ミッション

静まり返った村

ハヴィエの居城へ

戦いの終わり

断章

スカウト

逃げ場なき戦場編

ユウキの災難 1

ユウキの災難 2

49

ユウキの災難 3

53

ユウキの災難 4

ワンペア

ユウキの災難 5

の地獄

ユウキの災難 6

間稼ぎ

ユウキの災難 7

FOSSの才女 45

遅すぎた拘束

動き出すエースの

機内

空港跡での戦

大統領の決断と時

61

65

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9

5

41

36

29

19

15

9</

| | | | |
|-----|--|---------------------|-----|
| | | 闘、そして終わり | 72 |
| | | 断章2 | |
| | | 囚われの元海兵隊少尉 | 79 |
| | | 相棒の復活そして迷い…… | 84 |
| | | 現実 | 92 |
| | | ホームパーティー | 96 |
| | | グラハム大統領息女誘拐事件（一時凍結） | |
| | | Prologue（愛犬） | 100 |
| | | 断章3 | |
| | | 悲劇の地を訪ねて、過去との対峙 | |
| 106 | | 微妙な関係の二人、周りの視線 | |
| | | 113 | |
| | | ヴィアの想い | 118 |
| | | 傷ついた心 | 125 |
| | | 本編（一時凍結） | |
| | | エージェントVS巨人 | 129 |
| | | ターゲット確保 | 136 |
| | | サンドイツチのハム | 146 |
| | | 怪しげな古城へ | 154 |
| | | やつぱりこどもイカレてた！ | 160 |
| | | ハンサムぶりの隠れ家 | 169 |
| | | 番外編 | |
| | | ゲスト対談1 ユウキ&インタビュー | |
| 176 | | | |

現在の主要人物の装備

179

ゲスト対談2

〇〇

184

断章4

駄作者とメンバーの緊急会議

188

それぞれのプライベート

1

レオン

194

それぞれのプライベート

2

ユウキ

&ヴィア1

201

プロローグ

プロローグとその日俺は死んだ

此処は、どこだろう？俺事イチノセユウキはラクーンからレオンさんと脱出した後、米軍特殊部隊に拘束されこの状況にある。暗い部屋にぽつんと置かれてる状態だ。そこ

「落ち着いたかね？」

スーツ姿の男が入ってきた。書類を持って。

「怪我の手当てありがとうございます。ございます」

俺は素直に謝意を述べる。

「なに、それくらいどうって事はない」

スーツ姿の男は椅子に座り

「イチノセ・ユウキ。国籍日本 年齢18歳 両親は自衛官だったが事故と任務で殉職。

施設で育つか。……」

俺の身辺を調べた紙を読み、

「あんたは？」

尋ねると

「名は名乗れないが、政府情報局の高官と思ってくれて良い」

そう良い

「イチノセ君、率直に言う。我々はキミの能力を高く評価している。悪い話ではない。その若さであの地獄から生還するだけでも大したモノだ。」

アメリカ合衆国政府情報局高官を名乗る男は良い

「イマイチ要領を得ません、遠まわしに言わなくても結構です。簡潔にお願いします」

俺は言うと

「率直に言えば我々、アメリカ合衆国側に付けと言っているのだ、イチノセ君。君はラクーンでまずいものを見すぎた、そして知りすぎた」

ニヤケた表情で言い

「俺を殺すのか？」

恐怖心がまた蘇る。やっとこさであの地獄を脱出したにも関わらず、こんな目に遭うなんてそう思っていると米政府情報局高官は追い打ちを俺にかける。

「残念な話だが、日本政府にはキミの死亡を通達している。すまないがあのような情報を知った君をおいそれと日本に帰国させるわけにはいかないのだわかってほしい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

開いた口がふさがらなくなるとはこのことだろう。既に俺は死んだ人間とされこの世に俺は存在しない人間となつてしまつてゐる事に。

「あの事件は表に出すわけには行かない事件だ、それに君ともうひとり保護した警官のレオン・S・ケネディーだが彼はこちら側に付くことを了承した。条件付きだが」

高官は言い、俺もすぐに察しがつき

「き……き……貴様ツ!!」

怒りに椅子から立ち上がり高官の胸ぐらをつかもうとしたが、怪我が痛みすぐにうずくまる事になった。おそらくは、シエリー・バーキンの事だろう。流石政治家、汚いことしやがる。そう思ったが俺はよく考える

「(どうせ帰れないなら、俺が育つた施設に何か礼がしたい……)」

思い

「分かりました、私も条件付きですがそちら側につきましよう。」

答え

「わかつた、それでキミの条件は？」

言われ自らが育つた施設に見舞い金として援助金を払つて欲しいとだけ伝え

「わかつた、すぐにそのように手配する。それとキミの今日からの名前はイチノセ・ユウキではない」

言われ

「?」

首をかしげていると

「ユウキ・アルジェント」それが今日からのキミの名前だ。合衆国政府が責任を持つて君を一人前のエージェントに育て挙げる。心配はいらない。」

政府高官は言い俺は外に出るとレオンさんがいた。

「ユウキ!」

「レオンさん」

俺は先ほどの事を説明し

「そうか、既に死んだ人間扱いならどうしようもないな……せめてお前だけでも祖国にと思ったが」

レオンさんは一瞬暗くいうも

「今日からお前もアメリカ人だ、まあ仲良くやろう」

こうしてイチノセ・ユウキは死んだ。俺はアメリカ人として第二の人生を歩むことになった。

あれから数年

毎年、この日が巡ってくると悲しい気持ち心が心を包み込む。私事、近藤六花にとって忘れる事はできない出来事・・・10月1日 私の想い人だった一ノ瀬君が死亡した言わば命日だからだ、私が告白しようと決意した矢先の事であり、悲しみに暮れたのを今でも覚えている

「朝から何辛気臭い顔してるの?」

ルームメイトに言われ、そして言った本人もカレンダーを見て

「あつ・・・ごめん、無神経だったよ・・・彼・・・一ノ瀬君も生きてれば26歳だものね・・・」

彼女は倉咲美穂高校時代の同級生で私と同じ母校、藤見学園で教職に就いている。

「変な気使わせてごめんさい、でもやっぱり立ち直れない・・・よ」

私は沈んだまま言い、

「そうだよね、今だから分かるけどアンブレラが殺したのも同然だし、志半ばで死ぬなんて彼も思わなかっただろうしね・・・」

美穂は言った。全ては今から8年前に遡る。私たちが藤見学園の生徒だった頃、週明

けの月曜日学校に登校しその朝のホームルームで担任が言った。

「……皆に……残念な……知らせがる……」

担任だった先生の腕が震えていた……そこに

「先生、一ノ瀬の席が空いてますがあいつ病欠ですか？」

男子生徒が言ったが

「……日本政府から本校に通達があつた……アメリカ中西部のラクーンシティーに旅行に行つていた一ノ瀬がラクーンシティーにおける大規模な災害にあつて……亡くなつた……」

先生が涙をこらえていたのを見て覚えている。

「……」

その言葉に私達クラスメートは言葉を失つた。だつて5日前にあんなに元気だった彼が死んだ……当時の私自身信じられなかった……そこから、遺体のない葬式まであつと言う間だった。皆が彼の死を痛み、悲しみ、そして私は人目を憚らずにずつと泣きつばなしだった。大事な人が突然いなくなつた……この現実を受け入れる事が全くできず。

「あれからもう8年もたったね……」

美穂も言い

「本当ね……時が流れ去るのは早いけど、未だに心の傷は消えないもの」

私は言い朝食の準備を始めた。

「六花……」

美穂も言いながらテーブルの準備を行っていた。そしてもう片方も

陸上自衛隊 特殊作戦群拠点 習志野駐屯地

「今日で8年か……」

一人の幹部がつぶやき

「ええ、一ノ瀬先輩が亡くなって丸8年です。」

もう一人の幹部自衛官が言った。一人は広本玲也二等陸尉、もう一人は高本翼三等陸尉

「あいつが生きてたら俺らの上官になってったかもな……」

椅子に座りながら広本二尉は言い

「ええ、本当に惜しい人を亡くした嫌な事件でしたね……アンブレラが……アンブレラが一ノ瀬先輩を殺したのと同じですから……」

高本三尉は怒りを顔にしていたが彼ら一同が遠く異国の地アメリカで優希が生きて

いる事を知ることになるのは遠くまだ先の話・・・

優希の現在

「似合わないな……」

鏡を見て自分の格好を特に階級章を見て第一声を言うが

「にあつてるじゃないか、ユウキ、いや「アルジエント少佐」

レオンさんは言った。俺はあの後海軍兵学校に放り込まれ卒業、海軍士官の肩書きを持ち色々な所で働いてきた。ある時はCIA、そしてある時はFBIいろんな所で学びエージェントに必要な知識を吸収していった。そんな中、今回少佐に昇進と共に転属となった。

「ユウキもいよいよ少佐に昇格か、早いものだな」

同じ海軍の制服を着たレオンさんは言った。因みにレオンさんも海軍少佐の肩書きを持つてる。所属は、戦闘訓練と経験を積むためNAVY—SEALSに所属する傍ら陸軍のデルタやグリーンベレー果ては海兵隊フォースリーコンと今まで渡り歩き戦ってきた。だが、それも今日で一旦おしまいとなる。アメリカ政府からの命令で俺は転属となりアメリカ合衆国政府情報局の一員となる。そしてわざわざ今日、先にその機関で働いているレオンさんが迎えに来てくれたのだ

「お手数をかけます、ケネディー少佐」

俺は皮肉を込めて言う

「よしてくれ、ユウキ「ケネディー少佐」なんてただの肩書きに過ぎない、俺もお前も」

レオンさんは言い

「じゃあ行くかユウキ、いやアルジエント少佐。大統領が我々を待っている。」

レオンさんは言い、俺は海軍の制帽を取り部屋を出る。そしてレオンさんが運転する車に乗りホワイトハウスへと向かう事になる。車内で

「なあ、ユウキ……この8年どうだった……」

運転しながらレオンさんは俺に問い

「早かったよ……本当に目まぐるしいくらいに早かった……感傷に浸ってる暇なんてないくらいに……」

俺は答え

「そうか、俺自身ちよつと心配してたが……余計なお世話だったみたいだな……」

レオンさんは言ったが

「それでもないよ……ありがたいよレオンさんのような理解者がいてくれるのは」

俺は答え

「でも、唯一の心残りはクラスメートに会えないことくらいかな……」

一言答えると

「そうか……辛いな……」

レオンさんも同情するかのように言った。アメリカはあの後アンブレラが崩壊した
がそのウィルス兵器の技術は世界中に広まっていた。そんな中俺は今日から海軍将校
の肩書きを持った米国政府の情報部のメンバーになる。

「ユウキ、一応だが失礼な真似はしないように気をつけろよ、日本人のお前は大丈夫だと思
うが」

レオンさんが言い

「俺、今一応アメリカ人一国のトップにそんな事したら首が飛ぶよ」

苦笑しながら答えた。二人で馬鹿話してる間にととうとうホワイトハウスに付く。
ゲートで

「ケネディー捜査官だ、大統領命令でアルジェント海軍少佐をお連れした」

そう一言報告すると

「お疲れ様です」

警備は敬礼し通してくれた。そしてホワイトハウスに入ると

「8年ぶりですか、アルジェント少佐」

俺に言ってきたのは8前俺を無理やり半半ば脅迫しこの仕事につかせた人間だった。

「お久しぶりぶりです、アダム・ベンフォードさん」

俺は言うのと驚いたような顔をするが

「さあ、大統領がお待ちだ行こうか」

言われ

「ハイ」

答え三人で大統領執務室に向かった。

「失礼します、大統領アルジエント少佐をお連れ致しました。」

アダムさんは言い

「入れ、」

中から聞こえ、身だしなみの最終チェックをして

「失礼致します。」

レオンさんらと中に入る、そして俺を見て

「レオン、彼が・・・」

大統領は言い

「ユウキ、グラハム大統領閣下だ」

レオンさんは言い

「お目にかかれて光栄です。ユウキ・アルジェント海軍少佐であります」
名乗ると

「初めまして、そうか……」

グラハム大統領は俺を見て

「若いな……歳は幾つだね少佐」

尋ねられ

「今年の10月で26歳になります閣下」

答えると

「そうか、話はケネディー捜査官に聞いていた。私の前前任者がとんでもない事したよ
うで侘びの言葉も見つからない、民主主義の国であつてはならない事だ、個人の自由と
尊厳を束縛することなど……本当に申し訳ないアルジェント少佐」

グラハム大統領は頭を下げ

「グラハム大統領閣下、頭を上げて下さい、あなたに責任はありません、確かにこの8年
間は辛い事の連続でしたがケネディー捜査官や海軍の仲間たちそして私達と同じ思い
の人々に支えられて生きてきました。私は見てくれは日本人ですが、今はアメリカ合衆
国の国民として生きています。あなたを失礼、大統領閣下を恨むなど筋違いです。」

俺は答えた。そしてグラハム大統領は頭を上げ

「ありがとう、改めてようこそ情報局へ」

グラハム大統領は手を差し出し、握手を求めているのが分かる。それに応じ「よろしくお願いい致します。閣下」

俺は答えた。こうして俺は今日からアメリカ海軍からアメリカ合衆国情報部に転属となった。新たなステージでの戦いが始まるうとしていた。しかし俺は一人ではない。共に戦う仲間が居る、信条を共にする戦友がいる。そう感じた時だった。

オペレーション・ハワイエ編 ファースト・ミツション

200X年 南米 某国

「こいつが今回のターゲットか……」

レオンさんが写真を取り出す。ターゲットは「ハワイエ・ビルダコ」派手な暮らしで有名な男がいきなり表舞台から消え、アンブレラと接触を図ったなんて話を聞けば俺達情報部の捜査官が動かない訳にはいかない。

「貴様は何を企んでる?……」

横から写真を見て俺は問いかける。当然答えるはずもない。今回の任務は海軍から情報部に転属しエージェントとなつて初の任務となる。今回はレオンさんとバツクアツプの米陸軍の特殊作戦軍の隊員の……

「なあ、BOWなんて本当にいると思うか?」

後ろを振り返ると今回の作戦、「オペレーション・ハワイエ」で初めて組む米陸軍のジャック・クラウザーがいた彼は数々の任務で武勲を誇る戦闘のスペシャリストだ。俺とレオンさんを見て

「そういや、お前らは実際に戦った事があるんだったな」

クラウザーは言った。彼から見ればBOWは未確認生物に過ぎないのだろう。そう感じていた。俺はホルスターに入れてあるサムライ・エッジを取り出すとマガジンの確認をする。この銃はあの事件の時からずっと使ってる銃だ。海軍時代からこの銃の製作者のロバート・ケンドさんにメンテナンスをしてもらってる。彼もあの事件の生き残りでほんの僅かな差が生と死を分け生き延びている。

「ユウキ、銃の点検に余念がないな」

クラウザーに言われ

「いつでも撃てる様にしておかないと自分はおろか、仲間の身すら、守れない」

俺は答えると

「流石、ネイビー・シールズ」

クラウザーは言い

「癖は治つてないんだな」

レオンさんは苦笑していた。このサムライ・エッジにはロバートさんに頼み強装弾を装填して使用できるように銃其の物を組み替えて貰った新たにM9A1をベースにし各部品フレーム・スライドに至るまで全ての部品を吟味してもらった結果完成したものがこいつだった。

そこに

「ユウキ、もう一丁持つてきてるのか？」

レオンさんは地図を出す手を止め、俺の右ホルスターを見て言い

「ええ、どんなに9mm強装弾を使つていてもあの殺人生物と渡り合うなら高威力かつ大口径の銃があると判断しました。」

左の聞き手側のホルスターに「サムライ・エッジ」、右側のホルスターには8年前のラクーンから脱出した時に共に戦った相棒の「デザートイーグル」が収まっている。この銃は8年前のあの事件からずっとSEALs時代も使っている銃だ常にメンテナンスを行い、いつでも撃てるようにしておいている。今回の作戦においても、対BOW用の切り札として携行することができた。

それを見てクラウザーは

「頼りにさせてもらうぜ」

クラウザーは言い

「さて、案内人との合流ポイントの村の奥の協会まで急ごう。」

レオンさんは言い

「了解」

「了解だ」

俺とクラウザーは言い歩を進めた。俺達は知る由もなかった。既に村自体が手遅れになってしまっているとも知らずに、そしてまた地獄の戦いに身を投じる事になると：

静まり返った村

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺達三人は村の中に入るが

「「静かすぎる・・・・・・・・」」

俺達三人の声が被った。

「村人は何処に行っちゃまったんだ？」

俺も言い、ホルスターからサムライエッジを取る。そんな中村の中から放送が聞こえてくる。

「これまでに突如として失踪した少女は60人を超えました。その数は現在も把握されておらず増加しているとの事です、地元警察並びに当局は嚴重な警戒を呼びかけております」

放送は聞こえ

「・・・・・・・・噂通りの物騒な所だな・・・・・・・・」

レオンさんは言った。そして歩みを進めつつ

「誰もいない………妙だ……」

クラウザーは一旦言葉を切り

「……まるで戦場と同じ匂いがする……」

その言葉に

「戦場？」

俺とレオンさんは言った。それに対し

「ああ、死、そのものの匂いだ」

クラウザーは言った。周囲を警戒しつていると、奥から足を引きずった村人が歩いて

くる。

「??けが人か?」

クラウザーは疑う様子もなく近づくと、だがその時俺はなんとなく嫌な予感がした・

「おい、大丈夫か? 一体この村で何があったんだ?」

クラウザーは村人に聞くが答える様子はない。そんな時

「クラウザー、待て」

レオンさんが言い

「なんだ?」

クラウザーも言うそして

「様子が変だ……」

レオンさんが村人を見つつ言った。その時、その村人はクラウザーに襲い掛かってきた。

「クラウザーッ」

とつきの事に俺とレオンさんはほぼ同時に反応し引き金を躊躇いもなく引く、VP70にサムライエッジから放たれた9mm弾は村人の頭に顔面に二発が着弾し、後ろに吹っ飛ぶ

「相変わらず、いい腕してんなユウキ」

「レオンさんこそ」

俺達が言うなか

「突然襲いやがって……」

クラウザーは射殺した村人を見ていい

「これがアンブレラのウィルスの力なのか？」

クラウザーが俺達に問い

「ああ、だがこれは今まで、俺やユウキが見たモノとはどこか違う気がする」

レオンさんは答えた。

「レオンさん、クラウザー後ろッ」

俺はいい引き金を引く。手早くゾンビを射殺し周りを見るが銃声に反応したのかあちらこちらからゾロゾロ出てくる。

「急ぐぞ、案内人の身が心配だ」

クラウザーさんと俺とレオンさんは村の奥に進む。奥にも三体ゾンビがいる。

「頭だッ、頭を吹っ飛ばせ」

クラウザーが叫ぶように言い、三人で三体片付け後ろからきたゾンビも片付ける。

「二人共、いい腕してるぜ」

クラウザーがいい

「サンクス」

俺は答えた。奥に差し掛かり倒れている死体、そのまま前に前進しようとするが三体のゾンビ、俺とレオンさんが発砲していると

「助けてくれっ」

後ろで死体がゾンビ化しクラウザーに襲いかかっていた。レオンさんが迷わず発砲しゾンビを射殺する。

「借りが一つできたな」

クラウザーはいい

「なに、直ぐに返してもらおうさ」

レオンさんも言っている。奥に進み市場らしき所に出るがあたり一面死体と血の臭いでいっぱいだった。

「酷い……」

俺はぼそつと言い

「先を急ごう」

クラウザーは言った。しかし四方八方からゾンビが湧いて出る、この光景に俺は8年前のラクーンの出来事が脳裏にフラッシュバックする。そして

「こっちだ」

レオンさんが突破口を見つけ最初にクラウザーが柵を登る

「カバーします、行つて」

俺は距離を詰めるゾンビに冷静に頭に一発づつ9mm弾を撃ち込む。そして後ろから

「ユウキ、いいぞ」

レオンさんの声が聞こえ

「了解」

俺も柵を飛び越える。作の先で迎えてくれたのは

「ウエスピナー」

俺とレオンさんはつぶやき直ぐに銃撃し二匹の大蜘蛛を仕留める。

「こいつらもBOWなのか？」

クラウザーが言う中、背後のドアが開き

「チツ、大蜘蛛の次はゾンビかよ」

俺は毒付きながら、三体のゾンビの頭を吹っ飛ばし射殺する。射殺したゾンビの死体を見たクラウザーが

「見ろ、蛇の刺青だ」

言い俺もレオンさんも見る、クラウザーが説明する

「ハヴィエ率いる「聖なる蛇」とか言う私兵集団が的に残すマークらしい」

それを見たレオンさんは

「ハヴィエは一体ウィルスで何をするつもりだ・・・」

呟いた。俺は

「奴をとっ捕まえて聴きましょう」

答えた。先を進み、水辺の民家の中かから出てくるゾンビを倒しながら進み

「シッ」

俺は言い

「どうしたユウキ？」

レオンさんは言い

「何か見つけたのか？ ネイビー・シールズ」

クラウザーさんも言う。ハンドサインで奥の建物に、まだ人間、
「こくん」
が居る事を伝え、

二人共頷き、三人で内部に突入するそして

「クソツ、案内人だ」

クラウザーが駆け寄り

「おい、何があった？ しつかりしろ」

クラウザーが案内人に聞くと

「娘が……娘が……」

案内人はかすれそうな声で言い

「娘？ 娘が一体どうしたんだ？ 気をしつかり持て」

俺も言い

「あの娘が……怪物を引き寄せた……」

案内人は言う。

「怪物？」

レオンさんは言うなか案内人は続ける

「ハヴィエの居城から逃げてきたから助けてやったのに……ゲホツ……」

「ハヴィエの居城?……」

クラウザーは言い

「おい、その娘はどこだ? おい、しつかりしろ」

俺は横から近づき、脈を見るが

「ダメだ……死んでる……」

俺は言い

「ハヴィエの居城から逃げてきた……例の誘拐された女の子らと関係が?」

レオンは言い

「臓器を密売する「聖なる蛇」と失踪事件何か関連性があるのか?」

クラウザーが言い

「報告書からではこの失踪事件との関連性は立証できなかったが」

俺は答えた。俺達三人はここを立ち去ろうと背を向けた時背後から音が聞こえ、反射的に銃を向けるとあつたはずの死体が水中に引きずり込まれて言った

「あれは一体何だ?!……死体が消えた?」

クラウザーは驚いたかのように言い

「クソツ逃げられた」

俺とレオンさんが言うなか教会の中に入り倒れている女の子を前に

「レオン、ユウキ．．．今の化物はなんだ？．．．あんな奴らと今まで戦ってきたのか
?!」

クラウザーはいい

「どうやら、俺にはお前ら二人の過去を全て聞く必要があるようだ．．．」
クラウザーは俺達を見て言うのだった．．．

ハヴィエの居城へ

協会でのBOWとの戦闘の後俺とレオンはクラウザーに全てを語った。あの日……

1998年のラクーンシティで何があったのかを。クラウザーはそれを黙って聞いていた。しかし、今回はおかしいのだ、ラクーンの時は制御されたBOWなどはいなかった。だが、今回は明らかに制御されたBOWがいたのだ。俺達は全ての謎のキーとなるハヴィエ似合うべく行動を開始した。

「これが俺達の過去だ……泣けるだろ……元警官に元高校生それもユウキは元をたどれば日本人で本名は一ノ瀬優希だったのに日本国籍を抹消されアメリカで生きていく以外に道を絶たれちゃった」

レオンが全てをクラウザーに話すと

「なんてこった……お前らにそんな過去があったとは……」

レオンが話す中

「お二人さん、トーキングタイムはそれくらいにして先に進みましょうや、モーターボートが奥に転がってた」

俺がレオンに報告をいれると

「……………」

クラウザーが俺を見てるが

「?どうした」

聞くと

「いや、見かけによらずタフだなと……………」

クラウザーは言った。その後その女の子をボートに乗せ、皆で川を登って行く。そんな中女の子が目を覚ます。

「気がついたか?心配しなくても良い、君に危害は加えない」

レオンが良い

「ああ、心配はしなくても大丈夫だ」

俺も言った。そして

「俺達が助けたんだ」

クラウザーが言い続けて

「お前が例の娘だな、ハヴィエの居城から逃げてきた?」

そう言うとその女の子は

「村の人達は……………どうなったの……………」

俺達に聞き

「残念だが、皆死んだ・・・」

俺が答える。そして

「俺達はウィルス絡みでハワイエに接触したアメリカ人を搜索してる、ハワイエに会いたいんだ、命懸けで逃げてきた所申し訳ないが、アムパロへ道案内を頼めないか？」

レオンが言いその女の子は

「・・・・・・・・」

無言で頷いた。そうこうしているとダムが見えてきた

「あれが・・・そうか？」

俺は聞くと

「ええ、あそこを抜けてきたの」

その子は言った。

彼女の案内でダムの中を歩き始める。

「ここが君が逃げてきたダムを通るルートか・・・」

レオンが言い

「そういえばまだ名前を聞いていなかった」

俺が言うと

「マヌエラ……」

一言言い

「よろしく、マヌエラ」

俺は言い

「ここから先は注意深く行動して欲しい、俺達の指示に従って欲しい」

俺が言っているのと横から

「生きて帰れたかったら俺達から離れるなよ」

クラウザーが割り込むように言い

「……うん……」

マヌエラは答えた。そしてダム放水抗に入ると

「早速きやがった」

水の中からピラニアが飛んでくる。そしてピラニアを片付けると今度は背後にゾン

ビとダブルパンチだ

「あそこだッ」

レオンが空いているドアを指し四人でそこに駆け込もうとした時上からまた新種の

BOWが降りてくる

「どう見てもダイエツトのしすぎだろ!!」

俺は言いそいつを仕留める。四人でドア内部に入りドアを閉鎖する。中に入り

「ハヴィエの奴、侵入者を警戒してBOWを放ってやがる」

クラウザーは毒付きながら言い、そんな中

「マヌエラ、どうやってここを抜けてきたんだ？」

レオンが尋ねる。すると

「それ、どういう意味・・・」

マヌエラが言い

「いや・・・ただな」

レオンが言い淀んでいると

「質問に答えろ」

クラウザーが横から遠慮なしに言う。それに対し

「私が抜けて来た時は一匹も居なかったわ」

マヌエラは答える。

「「そうか」」

俺達は言い、先に進もうとすると

「待って」

マヌエラは言い

「ハヴィエに会ってどうするの?」

マヌエラは聞き

「あんな化物を飼育しているような奴を野放しにできるか?」

俺が今度は言い

「確かにそうね……」

マヌエラは顔を下げ、ぼそつと言った。その後俺達はマヌエラの案内の元ダムを案内してもらい中を進む中大きな放水口に出ると、そこには俺達が搜索していたターゲットがいた。

「「ハヴィエツ」」

俺達が言うつと

「すべてはお前のためだったんだ」

ハヴィエは話だし

「15年間私の言うつとおり、おとなしくしていれば化物にならないで済む。いい子だからそれまでの辛抱だ……」

ハヴィエは話、マヌエラは後ろに後ずさりし始めるその時

「ん……?なんだこの音は……」

上俺は上から大きな音が聞こえるのを聞いていた。そしてハワイエは予想通りの事を言った。

「Tーヴェロニカウイルスをくれた男もそう言ったんだ」

ハワイエはいい、俺とレオンは

「ヴェロニカウイルスだと?!」

その時

「ぎゃあ」

後ろを振り返るとハワイエの部下にマヌエラが捕まり俺達に銃口を向けている。

「お前を救えるのは、このアメリカ人ではない」

マヌエラにハワイエはいい

「お前の父である私だけがお前を救えるのだ!!」

それと同時に、放水されてきた大量の水が俺達を飲み込む、俺達は放水により流されてしまった……だが、奴がハワイエが言ったTーヴェロニカウイルスこれも俺は知っている。情報部の資料で読んだことがあるし、俺とレオン共通の友人のクレア・レットフィールドが体験した恐怖がまさにそれだったからだ

戦いの終わり

マヌエラの案内でダムを突破しそして居城にたどり着きBOWを蹴散らし、そしてクラウザーにユウキとレオンは大統領特令を受けている直属の捜査官である事を明かしユウキら一行は遂に真実にたどり着く。

「なんて狂った真似を」

ハヴィエを前に銃口を突きつけ俺は言った。それもそのはず。Tーヴェロニカウィルスは投与後15年間なじませないと体に異常をきたしてしまう程強力なウィルスでもある。そのためハヴィエは村の少女らを誘拐しその臓器を、マヌエラに移植すると言う狂気じみた事をしていたのだ。

「全く、正気の沙汰ではないな」

クラウザーもい

「用済みになったアンブレラの元研究員もズドンで始末したわけか・・・」

レオンも言うが

「お前らにはわかるまい、娘を救うにはこれしかなかったのだから」

ハヴィエは言うが俺には当然わからない。自らの娘を救うためとはいえ、罪のない年

増もいかなない少女らを大量に殺した罪は相当に重い。

「ああ、全然わからないねお前のような身勝手にテロリストまがいの犯罪者がやることは」

俺はいった。ハヴィエは嘲笑い

「そうだろうな、貴様らアメリカ政府の犬のような連中には理解できないだろう」

ハヴィエは言う

「ふふ、しかし此処までマヌエラを送り届けてくれた礼はしないといけないだろう。せめて貴様ら米政府の犬共に「意味のある死」を送ろう。」

ハヴィエは言い、俺達は上に気配を感じ上を向くと教会で対峙した怪物がいた。しかし怪物はハヴィエを見て、俺達には手を出さない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何をして居る、米政府の手先を殺せ!!」

しかし次の瞬間、BOWの尻尾の刺がハヴィエの胸に突き刺さり

「な・・・・・・・・なぜ・・・・・・・・だ・・・・・・・・?」

自分の胸に突き刺さる刺を見ながらハヴィエは倒れた。

「それを、自業自得と言うんだぜ。」

物言わぬハヴィエの死体に感染者化しないように頭に一発9mm弾撃ち込む。そし

て

「ユウキ、そんなこと言ってる場合じゃない」

レオンに言われ

「分かってる。」

俺は言い、サムライエツジをホルスターに戻し反対のホルスターから俺の切り札を取り出す。そして三人でそのBOWに銃撃を加える。流石は50口径威力が桁違いであり、効果的にダメージを与えていく。そしてBOWを沈黙させる。

「任務は完了だ、さっさとヘリを呼んでここを脱出しよう」

レオンは言い

「ああ、さっさとおさらばしよう」

クラウザーも同意し非常口に行こうとしたとき床にあの怪物の刺が突き刺さり一本がクラウザーめがけて飛んでいく。クラウザーは刺を撃ち落とそうと発砲したが銃弾は刺をカスリ刺はクラウザーの腕に刺さる。

「グハアツ」

苦痛に顔を歪めるクラウザーを見つつ俺達はBOWに止めを刺すべく残弾を撃ちまくる。そんな中、マヌエラが怪物の前に出る。俺達はいつでも撃てるようにマグチェンジを行い

銃口を向けるが怪物はマヌエラを襲うような仕草は見せず、まるで我が子を心配する母親のように俺には見ええた、そして何かをマヌエラは悟ったのか

「お母さん……」

そう言ったのと同時に怪物の目は閉じられた。

「ユウキ、あのBOW……マヌエラの母親だったのか……」

レオンが銃口を下ろしながら言い

「そうみたいだ……ハヴィエは自分の妻にも同じことをしたが失敗しBOW化してしまった。家族を救おうとした事はわからなくもないが……奴はやり方を間違えたんだ」
俺は言った。その後、政府が回収へりを送り込んでくれたため俺達は現場を脱出、帰還の途につくへりの中で

「だいじよぶかクラウザー?」

俺が手当しつつ聞くと

「ああ、大ジョブだ」

答えるが見た限り傷は深そうだった。しかし

「私はあそこで死ぬべきだった……」

マヌエラは言い

「いや、死ぬべき人間など一人もいない。」

レオンは言い

「そうだ、それに君には生きる義務がある、体の中に居る少女らのために」

俺も付け加えるように言った。帰還後マヌエラは合衆国の監視下に置かれたが未だに発症したと言う事例は聞いていない。クラウザーは傷が思ったよりも深く病院に入院となった。ウィルスは形を変えそしてより強力になって俺達の前に立ちはだかる。それでも俺達は負けるわけにはいかないのでから……根絶されるその時まで

断章

スカウト

あの作戦後、俺は病院に入院となった。腕の傷が治らなければおそらくは特殊作戦軍を除隊になるだろう。だが俺から戦いを取れば何が残るだろうか？俺は思いながら悶々とした日々を過ごしていた時に死刑の宣告は下された。

「というわけだ、クラウザー君に除隊勧告通知を渡すかどうかは君自身が決めてくれ、だが我々は君の腕の傷が完治するまで待つ余裕はない、どうしても残りたいのなら後方支援系統の職種に変えるしかないだろう」

上の連中は言い俺は

「……………ハハハ……………ハハ」

苦笑するしかなかった。用済みか……………そう思いつつ腕を抑える。自分にはもう兵士としての価値がない、戦えなければもう用済み、補充は腐るほど効く。こういう時にレオンやユウキた政府直属の連中を思い出す。そして

「……………また尋ねる。その時まで……………」

軍上層部言った時

「なるほど、アンタラがいらないって言うなら説得の手間が省けた。」

俺は背広の連中の後ろを見ると驚いた事にそこにはあの作戦以降会っていない、政府直属の情報部に勤務する捜査官、ユウキ・アルジエントがいた。

「誰かね？君は」

軍上層部は言うが彼が身分証を提示した途端

「失礼しましたッ」

まるでお偉いを見るかのような状態になった。流石に大統領直属の人間にはいかに将官の人間でも軍の高官でも何も言えまい

そんな中椅子に腰をかけ

「クラウザー、怪我の調子はどうだ？」

ユウキは聞いてくるが

「見ての通りだ、特殊作戦軍をお払い箱さ」

そんな中

「そうか、じゃあ俺達と一緒に働かないか？」

ユウキは言い

「????」

病室に居る軍の連中も首をかしげているが

「当然、必要なら俺が今グラハム大統領に確認を取るが？」

もう一緒に部屋に居る軍高官や将官俺の直属の上司は空気状態だった。

「わかった。そのスカウト受ける・・・いやお前らと一緒に働かせてくれ」

俺は言うところウキは

「ウエルカム、情報部へ」

そう言ってくれた。後に傷が完治した俺は正式に転属となり俺は情報部所属となった。俺の戦いは新しい場所で始まる・・・

逃げ場なき戦場編

ユウキの災難Ⅰ

とある飛行機の機内

「なあ、ユウキ……」

「なんだ？」

俺はぶつきら棒に言った。俺はオペレーションンハヴィエの後別動任務で新しいパートナーと組んでいたしかしこいつが曲者で元アンブレラの特務急襲部隊にわいるUS出身の奴でなんでも、裁判の際に政府側に付きあらゆる事を証言しアンブレラを潰すのに一役買った男だが俺は、「アンブレラ」と言う単語が出た時からこいつ……インテントをあまり信用できないでいた。俺がこんな事になる大元を作った組織の元人間だからだ。

「えつと……まあ……ファイルは読んだよ、うちの元会社が起こしたアウトブレイクで凄惨な目にあつたってまで書かれていた。日本国籍を失って今の仕事をしてるってそれに関しては申し訳なく思っているし……」

インテントが言うがそれに対し俺は

「ああ、その通りだ。お前が仲間じゃなかったら、大統領命令じゃなかったら脳天吹っ飛ばしてる所だ」

俺は言うとうと

「そうかつかしないでくれ」

インテントに言われ

「すまんが俺はお前を信用しているわけじゃないこれは覚えておいてくれ。妙な真似したら殺す」

俺は一言言うとうと目を閉じた。

インテントside

「今回の任務でのパートナーはかなり難しい人だな」

ファイルを見た時から思っていた。俺が元所属していたアンブレラが起こしたラクーンシティでのアウトブレイク事件での生き証人の一人、その天性的な能力を買われて政府の情報部に所属していることなど

「やっぱり、俺達は理解しあう事は出来ないのか」

インテントsideアウト

俺は寝付けず結局起きる、横には相変わらずインテントが居る。心のどこかでこいつ

は悪くないとは思っているのだがいかんせんあの事件が元となっている事を思うと仲間として認めたくないのだ。これではまるでガキじゃないかと俺は思いつつ

「インテント、さつきはすまん頭に血が上りすぎた」

俺は素直にインテントに誤ると

「いいよ、俺はそう思われても仕方がないと思ってるしね。仕事をきつちりと果たすだけさ」

インテントは言い

「それはそうと何か飲まないか？」

そう言われ

「ブラックコーヒー頼む、」

俺はインテントに言い

「OK、すいません、ブラックコーヒー二つ下さい」

キャビンアテンダントにインテントは頼んでいた。しかし水面下では悪魔の計画が進んでいた。

「で、今回の任務はこいつらのマークだよな」

インテントは端末から男の写真を三人移す。

「ああ、情報部が掴んだ情報だどこいつらどういうルートでTウイルスを手に入れたか

知らんが何らかの実験に悪用しようとしているらしい、」

インテントに言うと

「そいつらが、全席に乗ってるわけか……」

インテントも言い

「ああ、しかもこいつらはこの飛行機の貨物室のどこかに何やら物を持ち込んでいるよ
うで、かなり危険な物かもしれん」

俺は続けると

「なるほどな……こいつは大事にならない内に片付ける方がいいかもな……」

インテントも言い

「ああ、そこは同意だ、このマッドサイエンティスト共を捕まえてたつぷりと尋問しない
とな」

そう言っていると

「お客様、コーヒーをお持ちしました。」

CAが来たため、インテントは端末を引つ込め

「「どうもです」」

二人でコーヒーを受け取り飲み始める。しかし、事は水面下で起きていたのだ、ユウ
キとインテントが気づつかぬ間に……

ユウキの災難2 FOSの才女

「さて、相棒どのタイミングで奴らをふん縛る?」

俺はインテントに問う。インテントは驚いたように俺を見るが

「いがみ合ってもしょうがないだろ?互いに前を見ないと」

俺は言い

「ああ、よろしく頼む」

インテントとガツチリと握手を交わす。そんな中

「えつと・・・男同士の友情を深め合っている所・・・えつとお取り込み中の所すみません。コールサイン「イーグル」と「ヴァレン」ですか?」

俺とインテントに声をかけてきた女性がなぜか知らないはずのコールサインを言う

「!!」

俺達は上着の中の拳銃にそれとなく手を当てるが

「すみません、ここう言う者です」

彼女は身分証を俺達に見せる

「FOS・・・・・・ヴァリア・エルフィン・・・・・・んっ?」

俺はこの名前をどこかで聞いた事があったような気がした、インテントは

「ユウキ、FOSって……」

言っている。FOSとは「Field・Operation・Support」の略でありエージェントのサポートを行う政府機関である。主に無線による現場のサポート、そして現場要因によるエージェントの直接サポートそして、その両方をこなす三通りがある。彼女は一番最後の両方をこなすタイプにあたり、状況に応じてエージェントをサポートする任務に付く要員だ。そして俺は彼女の顔を見ると

「!!」

思い出す、8年前あの悲劇の最中俺とレオンさん、それにクレア、そしてシエリーらと共に脱出した一人の女の子だった。彼女は俺の顔を見て、満足したかのように微笑み「お久しぶりです、イチノセさ……いえアルジエント捜査官」

そう言っって席に座る。あの頃の面影があるが10人見れば10人が振り返る絶世の美女になっていた。

「ファイルは読ませて頂きました。一部機密扱いで大変でしたが、本当に心配していたんですよ?」

彼女、ヴィアは言い

「話の腰を折るようで悪いが、エージェントエルフィンあんたが俺達のサポートについ

てくれるのか？」

インテントが尋ねると

「ええ、専属でサポートします。USS出身のインテント捜査官やNAVY―SEALs出身のアルジエント捜査官には劣りますが一応戦闘訓練はアカデミーで受けております。」

俺らの過去をしれつと言い

「全く抜け目なしか」

俺は呆れ気味に言おうと

「私は再会できて嬉しいです、さて早速仕事に掛かりましょう。補足情報です」

ヴィアは俺とインテントに情報を送る。互いに端末を見て

「なるほどな・・・奴らT―ウィルスの「死者が蘇る」の所に着目したわけか」

インテントは言い

「確かに、不気味だからな幾ら弾を撃ち込んでも平気で起き上がる。脳天を吹っ飛ばさないと意味がない所か・・・だがどこでTを入手した？」

俺も端末を見て言うが

「すみません、まだFOSのデータベースや私自身調べてみたのですがそこまでは情報を掴めませんでした・・・、おおよそはブラックマーケットだとは思われますが・・・現

段階ではなんとも……」

ヴィアの顔が曇るが

「いや、上出来だ。個人で此処までできれば御の字だ」

俺は言い

「全く、良く此処まで調べてくれたものだ」

インテントも言い

「さてヴィア、銃のCANは鈍ってないだろ？」

俺が聞くと

「ええ」

ヴィアは言った。俺達は航空機内での銃器の携行が認められている。「政府直属の調査機関」の看板は伊達ではない。俺達はターゲットを拘束すべく動き出す。全ては手遅れだった……

ユウキの災難3

遅すぎた拘束

「さて、準備はOK?」

ヴィアとインテントに確認を取ると

「OK」

二人から返事が来るが前席の方から

「~~~~~!!!!!!」

「~~~~~!!!!!!ふざけるな~~~~~!!!!」

「~~~~~言え~~~~~!!!!」

何やら言い争う声が聞こえ

「??」

俺達はいい争う声のする方に行くと飛行機の操縦士?とおもしき男とターゲットが

二人とそのほかにもCAがいる

「ん?ターゲットは三人のはずだが・・・」

俺はインテント・ヴィアにアイコンタクトでそれとなく逃げ道を塞ぐように合わせ二

人はそれとなく移動する。

そして

「あの・・・何かあったんですか？」

それとなく声をかけ

「あんたは誰だ!!」

相当焦っているのかターゲットの片割れが言い

「あんたらこそ何なんだ？、ただの荷物じゃないじゃないか!!」

操縦士らしき制服を着た男は言い

「とにかく落ち着け」

インテントが落ち着くように言う。そして

「一体何を見たの？」

ヴィアがその操縦士に聞くが

「お・・・お前らには関係ない!! 部外者はすっこんでろ!!」

言い返され、

「(頃合だな・・・)」

俺は想い二人にアイコンタクトを再度取り

「それでもないんだな・・・ドクターバーンスそれにドクターシユタウン」

俺が言うと

「!!」

今までの動揺とは比べ物にならない動揺を見せ

「アメリカ合衆国政府情報局の者だ、生物兵器等条約違反関係で貴殿らの身柄を拘束させてもらう」

俺・ヴィア・インテントが身分証を提示する

「何を根拠にそんな事を」

バーンズ博士は言うが

「ネタは上がってるのよ」

ヴィアが全てを言い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

話を聞いたバーンズは顔面蒼白になっていた。それに対し

「情報部を舐めない事ね」

ヴィアは言った。インテントが

「逃げようとしたって無理だぞ此処は空の上だ」

そうドクターシユタウンに言うと同念したかのようにうな垂れ

「持ち込んだのはなんだ？」

近くの席に座らせ話を聞くと、彼らはなんと本国に「被検体」を持ち込もうとしてい

たのだとか、それも既に「T」を投与した被検体をそして話を聞けば上院議員がこの件に関わっている事まで分かり

「マズイな……」

俺はつぶやき

「ああ、上院議員が関わっているとは。おおよそ検疫検査を誤魔化すようにするためなんだろうが」

インターネットは言い

「上院議員?!、道理でFOSの情報でも上がってこないわけだわ……」

脇で共に話を聞いていたヴィアは言い

「「T」を何処で入手したの? 答えなさいッ!!」

強い口調で問い詰め

「……ブラックマーケットだ……」

二人は答えた。そして

「もう一人はどうした? 三人いたよな?」

俺は再度問うと

「……殺された……」

言い

「何?!」

俺達はそこで始めて事態が深刻な方へと傾いている事に気づく

「まさか……」

インテントが言った時

「そうです、貨物の様子を見に行く時に私も同行しました、そこにあんな化物がいるなんて……」

制服を着た操縦士らしき男は言い

「再度降りる事はできるか?」

聞くと

「丸腰は危険だ」

言われるが

「こいつがある」

ホルスターからサムライエッジを取り出す。インテントもUSP45を取り出し、ヴィアもM9を取り出す。その時、後部の方から悲鳴が聞こえて来た、全てが手遅れである事を指す悲鳴が……

ユウキの災難4

動き出すエースのワンペア

ユウキらが空の上の頃

「レオン、クラウザー先ほど、アルジエント捜査官から連絡が入ったが事態は深刻だ」
グラハム大統領はいい

「どの程度の深刻さですか？」

レオンが聞き、クラウザーも大統領の答えを待つ

「容疑者を二名確保、一名死亡尚容疑者が「T」を投与した被検体の持ち込みを確認、上院議員の関与が確認されているとサポートのFOSのエルフィン捜査官からの報告を最後に一切報告がない」

グラハム大統領は言い

「万が一の事態が推測される、あるいは既に手遅れと言う可能性も捨てきれない」

続けていうが

「ユウキに限ってそれは有り得ないと思います、今回の相棒もまあ曲者ですが元アンプ
レラのUSS出身のインテントがついていきますし、」

クラウザーも言ったが

「二人共、万が一に備えて待機しておいてくれ。」

グラハム大統領は俺達に命令を下し

「ハッ、了解しました」

俺達は下がる。廊下で

「なあ、レオン今回ユウキとインテントが請け負つてる任務はかなりヤバイのか?」

クラウザーは聞き

「ユウキに見せてもらった資料だとある科学者三人の拘束だが裏に何かがありそうな気がしてやばいような感じがするんだな……今頃あいつら空の上だろうし」

レオンは言い

「空の上?!、つまりは飛行機の機内か……これじゃア逃げ場がない……」

クラウザーも言う。万が一機内でアウトブレイクが起れば逃げる場所がない。ありとあらゆる場所で感染者のオンパレード状態になるのだ持ち込んでいる武器の弾にも限りがある。だから万が一なのだろうと二人は思っているのだ。

「ユウキの奴、デザートイーグル改まで持つてくくらい念入りに準備してたからな」

レオンが言い

「切り札はあるに越したことはない、問題は使いどころを誤ると取り返しが付かなくなる所だ」

クラウザーも考えるように言った。

空の上ではどうしようもないし最悪の事態が起これば………考えた
くないと二人は思った。頭を振るようにし

「それよかクラウザー、上院議員が絡んでいるとの報告だがこれに関してはどうする？」

レオンはクラウザーに言い

「問題はそこだ、おそらくは「T」に関する物でも持ち込むための検疫のパスを上院議員
のコネか何かを使ってごまかそうとしているのだろう」

クラウザーも言い

「乗ってる飛行機は何便だ？」

クラウザーも聞いて来る。

「ハニガンに頼んで調べてもらう、万が一の時に直ぐに動けるように準備はしておかな
いといけないしな。」

レオンとクラウザーのエースのワンペアも事態に備え行動を開始するのだった。

ユウキの災難5

機内の地獄

「なんで俺はゾンビばつかに好かれるんだ!!畜生ッ」

飛行機内で銃撃つちやいけません?!、そんな事を言ってる場合じゃない。

「これじゃラクーンの再来じゃない!!」

俺の横でヴィアはM9でゾンビを的確脳天を吹っ飛ばしに射殺する。飛行機の中で不安定な状態にも関わらずにもだ

「(いい腕だ)」

内心思っていた。

「ユウキ、このままじゃジリ貧だ。まずいぞ」

横でインテントがいつている。確かに俺達の任務は「容疑者の逮捕・拘束」で戦闘ではない。一応多めに弾薬は持ち込んでいたが限りはある。

「まいったな……」

俺も考え込んでいると

「コックピットからの返答ありません……」

絶望的な表情をしたキャビンアテンダントがいつている。

「なあ……インテント……」

「言うな……ユウキ……」

インテントも俺もマガジンを交換しながら言い、

「コックピットに呼びかけ続けて」

ヴィアが指示をだし

「なあ、インテント俺やばい予感がするんだが……」

俺は相棒に言うのと

「奇遇だな俺もだよバディ……」

それもそのはず。音信不通で数時間、それも機内でアウトブレイクが起きている。いくらその手のプロとは言えやばいような気がするのも無理はない。

「インテント、アンブレラだったらこう言う時どういったやり方で隠蔽、隔離するんだ？」

聞くと

「このパターンだと……戦闘機によるミサイル攻撃……だな……」

インテントは苦々しい表情で言った。

「戦闘機攻撃ッ!?!」

ヴィアは言い

「ちよ・・ちよつと待つてよ、私達まだ生きてるのよッ!!生存してるのよ!!」
言うが

「冷静に考えろヴィア、この機が人口密集地に墜落したらどうなる?それこそラクーン
アウトブレイクの二の舞だぞ」

俺は言い

「インテント、政府は決断するだろうか・・・この機の撃墜を・・・」

俺は再度尋ねると

「可能性としては大だろうな。最善の策だと思われてるだろうしな」

インテントは答え

「回避する方法は?」

聞くと

「操縦席に向かい、この機を操縦するしかないだろうな・・・」

インテントは言ったそして

「ユウキ、パイロットライセンスは?」

聞き

「お前よくわかったな、持つてるぜ空軍で取った。戦闘機と輸送機のだけど・・」

答え

「輸送機のライセンスがあるなら似たようなものだ、早く行かないと空軍のF-22が来てこの旅客機をミサイル攻撃しちまう」

インテントも慌てたように言い

「わかった。ヴィア、アホの科学者どもをふん縛つて来てくれ。こいつらが証人だからな裁判所にちゃんと連れ込まないといけないからな頼むぜ」

ヴィアに頼み

「ユウキに頼られるのは初めてね、OK任せて」

ヴィアは言い、後ろのキャビンアテンダントと容疑者×2に

「ついてきて、コックピットにこもるわよ」

ヴィアは言い俺達はここから「生きる」ために反転攻勢に打って出た!!

ユウキの災難 6

大統領の決断と時間稼ぎ

「ドアを閉めろ、ヴィアツ」

なんとかコックピットに入り込んだが

「ウアア・・・アア」

読み通り機長と副機長はゾンビ化しており

「インテント、始末頼むッ」

インテントに指示を出し

「いい加減にしてよッ、ゾンビに好かれても嬉しくないわッ」

コックピットのドアを閉めようとしているヴィアにゾンビがドアを掴みなだれ込もうとしている

「悪いな、この機を墜落させるわけにいかないんだ」

なんの罪も無い事は分かるが、俺達も自分の命が掛かっている乗客の感染者にサムライエッジの銃口を向け、9mm弾を撃ち込む。そしてなんとかドアにロックを掛け、

「ヴィアだいじよぶか？」

マガジンを交換しつつ聞くと

「大丈夫だけど……」

自分の服を見て

「返り血で汚れてもう着れないわこれ……」

言ったので

「ここから生還したら好きな服買ってやる、約束だ」

そう言い、感染者を始末したインテントと共に直ぐに操縦席に座る。ヘッドセットをつけて

「インテント、まず無線だ、軍でも情報部でもどこでもいいから俺達が生存している事を知らせないとヤバイ。」

俺は副操縦席に座るインテントに言った。

「ああ、同感だ此処でゾンビ共と一緒に炭になるのはゴメンだ」

インテントはいい

「妹を残して死ねないわ」

後ろで顔にかかった返り血を拭きつつヴィアも言った。このコックピットが俺達に取って最後の砦とも言えた。そして

「ユウキ、無線が繋がった!!」

インテントが歓喜の声を上げた。

その頃……

ホワイトハウス

「グラハム大統領閣下……ご決断を……既に情報部員らからの報告が途絶えてから数時間が経過しています。機内にエージェントアルジェント・エージェントヴァレンそれにエージェントエルフィンが任務遂行のために搭乗していますが殺られてしまった可能性が高いかと思われます。」

一人の政府高官は言い

「一人も生存者がいないと言えるかね……」

グラハム大統領は返し

「可能性は否定できない所はありますが、大統領閣下……大の虫を生かすには小の虫の犠牲は止む負えません。」

もう一人の高官が言うなかこの席に同席しているレオンとクラウドは

「レオン……マズイ流れにないか……このままだと」

小声でレオンに言い

「ああ、マズイ流れだ……ユウキとインテントそれにエルフィンからの連絡が取れなくなつて時間は立つがああ三人は「ラクーン事件」の生き残りだ早々に殺られるわけが

ないなんとか時間稼ぎをしないと……この際仕方がない……」

レオンは言う

「大統領閣下、よろしいでしょうか？」

レオンが手を上げると

「なんだ、レオン」

大統領は言い

「僭越ながらまだ時間があります。それにユウキらは連絡を取ろうと必死になっているはずです。まだ早急な決断をすべきではありません」

レオンは言い

「大統領閣下私も同意見です、高官の方々が何を言いたいのかは私も軍人ですから分かるつもりです。ですが可能性はまだあります。」

クラウザーも言い「なんとか時間を稼ぐ」

「(ユウキ……早くなんとかしろ……)」

そう思い

「何を呑気な事を言っているんだ」

そう行つたのは軍部の将官で

「大統領、やはり軍としては422便へのミサイル攻撃を具申致します。3人のエー

ジェントが搭乗しているのは事実でしょうが既に殺されていると推測できます。早急に手を打たねば全てが手遅れになります。」

軍部としてはやはり機体事始末したがつているのだろう。話を聞いていてレオンはそう思った。そんな中会議室に慌てた様子で人が入ってくる。そして大統領に耳打ちをする。そして

「スピーカーに出してくれ」

大統領は言い、スピーカーの声が聞こえてくる

「大統領閣下、報告が遅くなり申し訳ありません、エージェントアルジェント以下3名容疑者を3名中2名を拘束一人は感染体に殺害されたとの事です。」

スピーカーからユウキの声が聞こえてくる。

「アルジェント捜査官、今現在何処にいる?」

グラハム大統領は言い

「ハッ、我々は今コックピットになんとか立てこもっています。ですのでどこか、着陸出来る場所に誘導を要請致します。」

スピーカーからの声に

「着陸だど?!君は操縦できるのか?」

高官も会話に入ってくる。それに対し

「エージェント・アルジエントは航空機の操縦資格を持っていません、戦闘機・輸送機共に空軍での訓練の際に習得しています。」

情報部のおエライが俺のファイルを読む。

そして

「大統領、現在使用されていない空港跡に着陸させてはいかががでしょうか？。そこに事態に備えて、Tーウィルスのワクチンを摂取した海兵隊を待機させ感染者を殲滅する。それと同時に彼らの救出も行えます。」

国防長官は言ったが

「我々軍部は反対だ今すぐにミサイル攻撃で撃墜すべきだ」

国防長官・情報部の高官と軍部での間で激しいやり取りが行われるが

「わかった、諸君私の権限でその作戦を認めよう、すぐに使っていない空港跡に誘導し感染者の駆逐と彼らの救助に備えろ。将軍、海兵隊はすぐに行けるかね？」

グラハム大統領の言葉に対し

「ハッ、すぐにも展開が可能ないように準備しております。この自体に備えてワクチンを摂取済みの兵員約2個連隊が展開可能です。」

海兵隊ノーマン・ウッド将軍は説明する。

「しかし大統領・・・」

陸軍のウィル・ハーバート將軍はまだ何かを言おうとするが

「話はこれで終わりだ」

バツサリと切る。

そして

「アルジエント捜査官、聞いての通りだもう少し持ちこたえてくれ着陸出来る空港に誘導を行う。」

ヘッドセット越しに聞こえる声に

「ハイ、大統領閣下全力を尽くします」

答え

「皆、聞いたなまだ「希望はある」俺は後ろに言った。そうまだ俺達は見捨てられたわけじゃない。のだから

ユウキの災難 7

空港跡での戦闘、そして終わり

422 便機内

「ユウキ、この地獄から生還したら一杯キメないか、いい店がある」

となりの席でインテントが言い

「ああ、そうだなたまには潰れるほど酒を浴びて見たいものだ」

操縦桿を握りつつ俺は言った。その後ろで

「さっきの約束果たしてもらおうわよ？」

ヴァリアも言ってる。と

「ユウキ、見えてきた誘導灯だ海兵隊の連中も大盤振る舞いだな」

インテントは言い

「さっさと降りよう、外の空気を吸いたい。」

俺は空軍で受けたキチガイ訓練を思い出しそれに添って着陸する。その頃外では

レオン・クラウザー side

「鮮やかなランディングだな、本当にNAVY—SEALS出身なのか？」

クラウザーは言い

「ユウキ自身いかな状況にでも対応できるような訓練を望んだからな陸・海・空ありとあらゆるところで訓練を受けた結果が今のアイツだ、精鋭だろ？」

レオンはクラウザーに言いつつも

「(本当に頼もしくなったな・・・強くなった・・・頑張ったな・・・ユウキ)」

8年前の彼と姿をダブらせてもそこにもう不安を感じさせる面影は無かった。

「おつレオン、海兵隊の連中が突入するぞ俺達も突つ込もう」

クラウザーがホルスターからMk23を取り出しレオンもVP70を取り出し突入の準備を行う。

レオン・クラウザーsideアウト

「ブレーキ全開、インテント逆噴かけろ」

俺は指示を出し

「わかった、OK」

インテントが逆噴射をかける。強い衝撃の後に機体が止まる

「ふ・・・ふふふふははは・・・生き延びた・・・やったぞ・・・」

俺は操縦桿を握っていた手に汗をかいていた事に気づいておらず

「やったぞ、相棒!!」

となりのインテントも興奮状態にあった。そして背後では突入したであろう海兵隊員らのもつM4のけたたましい銃声が聞こえる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺達三人はドアの前にそれぞれ銃口を向けていると

「おい、ユウキ・インテント生きてるか!!俺だクラウザーだレオンもいるここを開けろ」
ドアの向こうからクラウザーの声が聞こえ、ドアを開ける。

「生きてたな、お前ら」

クラウザーが言い俺達はコックピットを後にする。

そして機体の外に出ると

「アルジェント捜査官にインテント捜査官それにエルフィン捜査官ですね? FBIのバナスターです。」

男は身分証を提示し

「容疑者はこいつら二人だ・・・・すまんが後頼む疲れた・・・・」

バナスターに言い

「お任せを、大統領から伝言です。「よくやった」との事です」

その伝言に俺らは手だけ降った。そして

「おつかれさん、ユウキ・インテントにエルフィンも」

レオンが俺達を見回して言い

「ふう．．．一杯やりたい．．．」

俺が言っていると

「大変だツ!!貨物室に積まれてた被検体がツ」

海兵隊らの将校が騒ぎ始め、

「結局はこうなるんだよな．．．」

俺達は全員銃を確認すると

「さっさと始末しよう」

そう言い騒ぎのする所へと向かったが

「．．．．．ツイてない．．．」

俺はそう思った現場で海兵隊員らを惨殺してるのはどう見てもタイラントにしか見え
ない被験者は数万分の一の確率で発症するタイラント被験者だったのだ。これでは、
M4の5.56mm弾などは殆ど役には立たない。

「あいつら、まじか!!」

毒付きながらも銃撃を加えつつ

「ロケランはないのかッ?」

周りに叫ぶと海兵隊員らが慌てて装甲車等に探しに行く。タイラント相手では9パラなんぞ鼻くそみたいなものだ。ないよりはマシ程度でしかない。もう一つのホルスター・・

オペレーションハビエ以来となるデザートイーグルを抜き

「来いッフランケンツ、相手になってやるよ」

俺はヴィアに意識が行っていたタイラントに自家製で作った50AEダムダム弾を撃ち込む

マグナムは本来ハイパワーで弾丸を射出するが俺は故意に火薬の量を調整しつつ減らし

弾頭をナイフで加工したその結果、貫通を目的とした弾丸ではなく着弾と同時に弾頭が変形し肉と裂き骨を砕くと言う凶悪な弾丸に変えていた。しかしこれはあくまでB・

O・W・用に過ぎない。

用に過ぎない。

奴も流石にこれは効いたのかヴィアから俺に意識を向ける。それでも俺は怯まず弾倉が空になるまで撃ち続けマグチェンジの際に今度はノーマルの50AE弾入のマガ

ジンに交換しハイパワー弾を叩き込む。周りでもヴィア・インテント・クラウザーそして海兵隊員らが必死の攻撃を加える中

「ユウキツ、そこを退けッ」

レオンの声が聞こえレオンを見るとその手にはA T 4が握られていた。レオンが発射するまでの時間を稼ぐためデザートイーグルを撃ちまくっていたが

「ガキッ」

スライドが後退しなくなった。急いでチェックすると排莖不良を起こし銃内部も損傷してしまっていた。

「クソッ」

ホルスターに戻し、サムライエッジを取り出し、射撃し続け

「皆、退避しろッ」

レオンの合図で皆離れ発射されたロケット弾は見事に命中し奴は爆散、肉片になっていた。その後現場の安全確認を行いクリアリングミスがないかを徹底し安全が確認され晴れて任務が完了となったかに見えたが俺達にはもう一つ任務があった

「な?????
な・・・な・・・なんだお前ら」

目の前で驚いているピザデブがいるこいつが今回の事件で影で協力し国内に被検体を持ち込もうとしていたのだから

「ジャクソン上院議員ネタは上がっています、素直に捕まるか、この場で我々に射殺されるかお選び下さい。」

俺達は全員が銃口を向ける中

「ジャクソン議員貴方は海兵隊時代にとんでもない犯罪を犯していますね、」

ヴィアの表情にジャクソン議員は恐怖に凍りつくがさらに追い打ちをかけ

「素直に白状されたほうがいいですよ？既に貴方の部下は良心に苛まれていたと全てを話してくれましたから政府は彼に対し司法取引を認め本来であれば重罪ですが刑は軽くなりましたから・・・最も貴方は極刑は免れても・・・一生ムシヨからは出られないでしょうけれども・・・」

ヴィアのこれが完璧にトドメになった上院議員は抵抗する素振りも見せずに拘束されその後は・・・言うまでもないか・・・因みにこの事件は大統領令により最高機密となったそれもその筈だ国内でアウトブレイクが置きかけていたなんてしたらパニツクどころではなくなるからだ。

断章2

囚われの元海兵隊少尉

情報部オフィス

「ユウキ・・・書類作業手伝ってくれ・・・もう俺ダメ・・・」

相棒のインテント事本名イント・ヴァレンがへロへロの状態になりながら書類を書いている

「オレハシャチク・・・オレハシャチク・・・オレハシャチク・・・」

それを見て

「あいつ大ジヨブか?・・・」

俺自身心配になる、その時

「ユウキ・インテント居るか?」

オフィスにレオンが入ってきた

「ああ、大丈夫だどうした?」

聞くと

「これから軍刑務所に行くぞ」

レオンは言い

「ちよい待った、俺は軍法に違反すること何もやってないぞ!!」

俺は言い

「俺もだ、勘弁してくれ・・・」

インテントが言うなか

「違う、彼を迎えに行くんだ」

レオンは言い俺達にファイルを渡す。横からインテントも覗き込む

「なになに・・・」

ファイルを読むと

「洋館事件前に起きた黄道特急事件について」

と記されておりそこには、当時のラクーン市警の特殊部隊S・T・A・R・Sの隊員であるレベッカ・チェンバースともう一人の人間の事が書かれていた。

「なるほどな、でもこの元海兵隊少尉、村人大量虐殺で死刑になってるじゃないか」

レオンに言う

「それをエルフィンが覆したんだろ。俺達が逮捕したジャクソン上院議員が当時のその少尉の上官で命令のした本人だ。それにその元少尉は最後まで隊長らを止めようとしている。し村人を一人も殺害していない。」

レオンは語り

「じゃあ、これって……」

インテントも言い

「そう、二人が思っている通り完全な冤罪だ。」

レオンはきつぱりと言った。

「大統領に進言してみたんだ、この通り証拠もある裁判の最審理を要求しますとそしてその結果が「無罪」軍部は彼に対する冤罪を謝罪し、名誉回復と共に職場に今日復帰するらしいがまあ、大統領がB. O. W. と戦える優秀な人材は常に不足している。この事で彼は海兵隊に復帰し二階級特進で大尉なつたと同時に情報部に移籍してもらうの
や」

レオンは語り

「それ本人に到達してるの?」

聞くと

「いやまだだ、この通り命令書もある。さあ行こうか」

こうして俺達3人は軍刑務所へと行くことになった。

「そういえばクラウザーは?」

インテントが聞くと

「今頃書類地獄だろうさ……あいつ元々は実戦部隊出身だからオフィスワークは苦手みたいでな」

レオンが言う頃

「クソツ、まだこんなにあるのか!!いつなったら終わるんだ……俺は戦闘は得意だが書類仕事は苦手なんだ!!畜生」

オフィスで一人毒ついているクラウザーが居たそうな……www

そういう中俺達は移動し軍刑務所に到着する。すると既にターゲットは出てきている

そこに

「政府情報部だ、」

そうレオンさんが言う

「待ってったよ、海兵隊の上官から言われたもんでね、海兵隊大尉の肩書きを持ったまま転属になるってなあの事件に関わっちまったら逃げようがないからな……」

若干疲れたような言い方を彼はしているが

そう言い、俺は前に出て手を出し

「ようこそ情報部へ、ベリー・コーエン大尉」

そう言う

「ああこちらこそよろしく頼む」
それが俺達の出会いだった。

相棒の復活そして迷い・・・

「これはどう？」

俺は今、休暇でサンフランシスコに來ている。目的は二つ。まずはヴィアとの約束を果たす。もう一つは例のブツを受け取る。しかし

「もう、ちゃんと見てよ」

俺はヴィアを見る

「お・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を失う。元々スタイルも良い為本当に何を着ても似合うが本当によく似合う

「どうかনা？」

それに対し

「ああ、似合ってるよホントに」

俺は言った。しかし

「姉さんばかりずるいです、ユウキさん私はどうですか？」

妹のアリサさんが言った。

「本当に見違えたね、まあ8年も見てなければ変わるよな」

俺は言い二人を見比べ

「うん、二人共似合ってるその二着俺が買うよ、約束どうりに」

この間の任務の際に言った約束通り服を二着購入した（まあ妹の分は想定外だったが再会の記念とでもいいえば良いだろう。）

そのまま昼食をレストランでとったが、ふと俺は手が止まり周りを見る。周りは家族連れ・・・子供と食事を楽しむ風景・・・家族の団欒・・・俺にとつてこの8年間はどうかただだろうか・・・振り返れば戦いづくしの一言だ・・・特殊部隊でのSEALsでの戦闘経験の習得・・・FBIにCIAでの捜査官としての技術習得・・・休まる時などひと時も無かった。」

「大丈夫・・・？」

ヴィアが俺の顔を見て心配そうにしている

「あ・・・ああ問題はないよ」

俺は普通に昼食を取った。しかしヴィアの目はごまかせていなかった。

ヴィア side

「・・・・・・ユウキ・・・やっぱり故郷が恋しいのね・・・無理もないわ・・・あんな卑劣極まりないやり方で日本人としての存在を抹消されて・・・ずっと戦い続けてきたんだもの・・・」

目の前で美味しそうに昼食を食べてる姿すら無理しているように見えた。

ヴァイスサイドアウト

食後にモールを後にし

銃砲店に向かう

「銃砲店ケンド」

ここは同じくラクーンの生還者であるロバート・ケンドとその兄ジョウ・ケンドが経営する銃砲店だ。

「こんにちわ、」

店内に入ると

「ユウキか、ちょっと待ってくれオーダーしてもらったブーツを持ってくる」

ジョウが裏えと引っ込み

「ユウキ、感謝するよあの銃最後まで使ってくれて」

ロバートは言い

「感謝するのは俺のほうさ、この8年間俺の命を守り続けてくれたんだ、最後まで俺にとつての「切り札」であつて「守護神」だったよ。」

俺とケンドが語る中

「ユウキ、今日ここに何を受け取りに来たの？」

エリゼは言い

「確かに一体何を注文したんですか」

アリサも見ている。そんな中

「ほらご注文の品だ」

ジョウが持つてきてくれた。ケースをジョウはあけ

「ユウキ・アルジエント仕様の10インチデザートイーグル改だ」

ジョウは言い

「銃身やアウターバレルはメンテナンスフリーのクロムステンレスに変更し、注文どうりにアンダーと上部に20mm企画のレールを装備。これで、レーザーサイトやフラッシュライトと言ったアタッチメントを装備できる。後はグリップもオリジナルと違い木製から変更した。メダリオンにも「RACCOON・POLICE」と打ち込んであるおまえさんのこだわりをそのままにしてある。一緒に6インチのスライドも一式付けてあるから抜かりはなしだ。」

等等説明を続け

「こいつならゾンビだけじゃないどんなバケモンでも仕留められるだろう!!」

自信満々にジョウは語り

「名前はこのいつにつけてるのか？」

俺は冗談半分に聞くと

「ああ、ライトニング・ホークだ。稲妻のように輝くボディでありながら鷹のように獲物を仕留める。そこから持ってきた。」

ジヨウは語り

「ふむ……ライトニング・ホーク……気に入ったよ」

俺は銃の細部までチェックし

「そうだ代金は……」

財布を出そうとした時

「いいよ、お代はタダだ。その代わりに次のカスタム依頼もよろしく頼むぜ」

そう言われ

「でも……」

そういうが

「それでいいさ」

ジヨウも言いロバートも頷いた為俺も納得する事にした。そしてエルフィン姉妹を送る為家まで行くと結構な時間になっていた。

「ふう……」

やはり疲れると思っていると

「今日は家に泊まっていかない？、時間も遅いし」

ヴィアは俺の荷物を持ちつつ言い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

開いた口がふさがらなくなるが

「積もり積もった事だつてあるじゃないですか話しましょうよ？」

その一言に

「・・・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・」

俺は車を止め。彼女らの家に厄介になる事になった。

夜。

彼女とはラクーン以来だが色々と話せた。やはり両親があゝの事件で死亡してしまつたことや姉妹が苦勞してここまで来た事。この話を聞くと、両親を失つた事は同じだが、施設で何不自由なく育つた俺とはえらい違いがある。

「やっぱり、立派なだよな・・・・・・・・彼女・・・・・・・・」

俺はケースに収められたライトニング・ホークを眺めながら思った。そうしていると

「こんばんわ〜」

ドアを開けヴィアが入ってきた。マグカップをもつて。

「どうした?」

俺は言い

「こっちのセリフよ、レストランから気になっていたけど、本当のこと言ったら?」

マグカツプを置きエリゼは言った。

「……お見通しなんだな……」

俺は言い話し出す。故郷が恋しいこと、高校時代の同級生らは今どうしているかとう事、そして何よりも孤独感が半端ない事。

「よく特殊部隊の上官が言っていたよ……チームは永遠じゃない……最後の頼みは家族だつて……でも俺には家族はいない……チームしかない……同僚しかない……」

俺は話す。すると

「……ユウキ……傷の舐め合いでもいいじゃない……一人で抱え込みすぎてこじれくらいならそっちのほうはまだましよ……」

ヴィアはマグカツプを置きこっちに来る

「へ?!……おい……ちょ……」

ヴィアに組み付かれる形でベツトに倒れこむ。

「おい……つて……」

言葉を失った。ラクーン以来だ彼女の涙を見たのは

「このまま一人で．．．戦い続けるの？．．．壊れるまで戦い続けるの．．．？」
ヴィアは言い

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

俺は黙るしかなかった。そして

「貴方は一人なんかじゃない決して．．．わた．．．しが．．．い．．．るから」

そう言うヴィアはそのまま寝息を立てながら寝てしまった。

「ヴィア．．．．．．．．．．」

俺は自身の今後を深く考えるきっかけになったとお思った。そこから俺達の距離はグッと近づく事になる．．．．．

振り返ると眠っていたヴィアが起きた。

「ごめん、起こしちゃったか」

俺は頭を掻きつつ言っていると

「さつきも言っただけど、本当にあなたは一人じゃない、孤独じゃない。レオンがいるクラウザーがいるそして相棒のインテントがいる。私だって、それにアリサも。」

ヴィアは言い

「残酷な人生だったのかもしれない。両親を失い、祖国に帰れなくなった事も」

ヴィアは続けて言い

「私はいつでもユウキの味方だよ。」

俺は何も言わず、いつ何時も肌身離さず認識票と共に付けているブローチを外した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつも見ると辛くなるから見ないようにしてきたがそれを今は開ける。そしてそれをヴィアに渡す。

「優しく、微笑んでるわ・・・」

ヴィアは言い

「両親だよ。お袋は訓練中の事故で殉職。親父は・・・機密任務中に戦死。これで俺は俺一人になった。」

「……………」

ヴィアは黙って聞いていた。俺はこの事を話したのはヴィアが初めてだった。ブローチの存在を明かしたのも……

「関係を断ち切りたくなかったんだ……故郷との繋がりを……両親が眠る場所を忘れたくなかった……こんな形で今は「アメリカ人」だけど心は日本人のままではない」

ヴィアの顔を見ずに俺は外を見たまま言った。今日の一日を振り返り、やはり休まる時はないそう思ったのかもしれない。今日一日を振り返り、やはり休まる

「今日は貴方の事また一つ知ることができた気がする。でももう寝ましよう？睡眠は取らないと体に毒よ？」

ヴィアは俺の手を引きベッドへと戻る。

「お前も一緒に寝る気か？」

横になる俺の隣に腰を下ろしたヴィアに対し

「ダメ？」

ヴィアは言ったが

「お前の妹に見つかつたら俺はなんて言い訳すればいいか教えてくれ？」

言うとうと

「……寂しく一晩を過ぐすよりは遥かにマシかと思っただけど……」
言われ

「……まあ……その当たってるわな……いつも一人部屋で寝てるしな……」
素直に認め

「今日一晩は大丈夫だよ……夢の中で会いましょう……」
「そういい今度こそ俺もヴィアも夢の世界に落ちていった。」

ホームパーティー

ヴィアの家で一晩厄介になった後、皆で今日は集まりホームパーティーを行っていた
「レオン、これ旨いぞお前も食え」

クラウザーは皿いっぱい料理を盛り

「ユウキ、飲もうぜ今日くらいは仕事の事を忘れたっていいじゃん」

インテントはビール片手にラリっている。

「ハア〜」

ため息を付きつつ周りを俺は見る。何時はキリツとしていてもこれが大統領直属の
エキスパート集団なのかと頭を抱えたくもなるくらいのだらけ具合だ。そんな中

「ユウキ、箸が進んでいないみたいだけど口に合わなかった？」

ヴィアに横から言われ

「いや、周りを見て呆れていたただけだ」

俺はそう言うとおレンジジュースを飲む。こんなに落ち着いて過ごせる日があつた
だろうか？今日の集まりで思った。あの日から幾年、SEALsで鍛えFBI・CIA
などで学び今日まで生きてきた。血と硝煙を纏いながら。そんな中

「どうした黄昏て？」

ビリーがビールを飲みながらこつち来た。

「いや、今までの事を振り返っていたんだ・・・ホントに色々あったなと・・・」

俺が言うところ

「ユウキ、あなたの事は情報部でのファイルで読ませてもらったかなり茨の道を歩いてきた人間だって。それでいてとんでもなく優秀な捜査官だとも・・・戦闘技能・生存術・どれを取っても最高評価の記録が残っていたよ。」

ビリーに言われ

「そりやどうも」

俺も答え

「大尉もバイオハザードからの生還者なんだよな、それも洋館事件前の事件の」

俺が言うところ

「ああ、あれはとんでもない事件だった」

一言言いビールを煽る。

「ユウキはラクーンから脱出した一人で生き証人みたいなもんだろ？」

ビリーは言い

「ああ、全てを見た・・・人の尊厳が踏みにじられて行くような悪魔の実験の証拠もそし

て・・・多くの・・・罪のない人々が死んでいくのを・・・今でも夢に見てうなされる時があるよ。」

正直に俺は答えた。事実今の今でもトラウマのようなものだし。そんな事をビリーと二人で話してると

「ユウキ、ビリー今日これ持ってきたぜ」

インテントがクローラーボックスから肉の塊を取り出す。

「ステーキだよステーキ、皆で食おうぜ」

肉をヴィアに渡し皆でワイワイガヤガヤと過ごす。しかし心の奥には故郷の友を友人達を思うとやはり寂しく思う自分がある。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

視線を感じ振り向くとレオンとヴィアが見ていた

「ユウキ、大丈夫か？」

レオンは言い

「まあ・・・ね」

俺は言葉を濁す。

「無理しなくとも良い、俺達仲間いる。寂しく感じる時もあるかも知れないが」

レオンは言ってくれ

「寂しくなったらいつでも遊びにおいでよね？」

ヴィアも言ってくれている。故郷は千里と遠くても此処アメリカでも良き友に戦友に恵まれたと感謝している一日だった。ちなみにその日のパーティーはクラウザーとインテントが酔っ払い、レオンは潰れ、俺は食い飲み過ぎでダウンなど大いに盛り上がる事ができた。しかし水面下で次なる災いは起きてしまっていたのだ……。

グラハム大統領息女誘拐事件 〔一時凍結〕

Prologue 〔愛犬〕

アメリカ某所

「此処がユウキの家か」

「何とまあ・・・見事な一軒家だな」

「でもセキュリティー凄いな、流石相棒」

「凄いわ」

レオン一行は言いつつも

「とにかく中に入ろう。ボケつと突っ立っていると通報されるぞ」

「そいつは勘弁」

レオンは言い呼び鈴を推すがユウキが出て来る気配はない

「あれ？」

「アイツ何してんだ？」

レオンとクラウザーが言う中

「シッ」

ヴィアが静かにと言い聞き耳を立てると

「待て!!待てツ!!!ステイ!!!」

ユウキの声が聞こえる中「中に居る同居犬」の声が聞こえて来る

「ワンワン!!ワン!!」

「おわあ!!舐めるな、舐めるなって!!!顔が汚れる!!!」

それを聞いたレオンは

「犬?.....!!」

言い何かに気付き

「ははあくん、とうとう検疫をパスしてユウキの元に来たわけか「あのワンコ」

クラウザーが反応を示し

「やっぱりか?」

レオンも言い

「どういう事だよ?」

「そうそう」

インテントとヴィアが言う中

「まあまあさつさと入ろう」

インテントがドアを開け

「相棒はいるぞ………って………うわ!!」

玄関に入ったとたんにインテントは何か押し倒され

「うわっ………ぺっぺっ………そんなに舐めるな!!!舐めるなって!!」

インテントの顔を舐めまくる

それを見た4人は

「犬と言うよりも狼犬みたいね」

ヴィアが言い

「元気にしてたか、兄弟」

クラウザーはしゃがみこみ狼犬を撫でる。すると

「ワン!!」

尻尾を思いきり振り、レオンも

「久しぶりだな、それにしても良かったな。アメリカでの生活も気に入ると思うぞ」

レオンも言う中

クラウザーもまた何処か嬉しそうだった。

「クラウザーさんこの狼犬知ってるの?」

「ああ、先の大統領の娘を探しに俺とユウキとレオンそれにインテントはスペインの錆びれた田舎村に潜入したが色々ヤバかった、そこでコイツとあった。色々ヤバイと

事を助けてくれてな。その後ユウキに懐いちゃまって付いてくるようになったから最後まで連れまわしたんだな。そして無理言って検疫検査をパスしたらって条件付きでユウキが任地で拾った飼い犬って事で連れてきた訳」

クラウザーが説明し

「へえ………」

ヴィアもしやがみ込みじー……つとその狼犬の目をのぞき込み

「ふふ、よろしくね」

頭を撫で

「ワンワン!!」

吠えるとヴィアにお腹を見せるように寝転ぶ

「フフフフフフ（*?▽?）フフフツ♪」

笑ながらヴィアもじやれつつ

「ほれ、インテント、タオル」

「助かった」

タオルで顔を拭き家に入る。ソファアに座り

「やっぱりと言うかなんと言うか懐き具合が半端ないな」

俺の横に座るワンコを見てクラウザーが言い

「そう言えばユウキ、名前は？」

ヴィアに言われ

「これからだよ。まさか此処まで懐くなんて思っても無かったから」

「日本風にポチとかサムライブレードとかどうだ？」

インテントは提案し

「もう少し捻ろうぜ、このキリつとした顔つきにポチにサムライブレードはないだろう」

クラウザーが言い

「確かにな。「あの巨人と戦う時」に雷の稲妻を背後にさっそうと遠吠えと共に登場した姿は良かった……うーん、サンダーボルト？」

「……………」

俺はイツヌを見て

「……………センチネル……………」

呟くと

「ワン!!!」

吠え

「ユウキ今なんて言った？」

レオンは言い

「センチネル」

言うとは足元の狼犬は

「ワン!!」

吠え

「決まりね」

「ああ」

「等の本犬がお気に召したら俺達はどうこう言えないな」

「相棒の家の番犬の名前は命名「センチネル」に決定だな」

四人は言い

「さてとお次はセンチネルの食の好みだな・・・」

5人は言うのだった。

断章3

悲劇の地を訪ねて、過去との対峙

ヨーロッパに発つ数週間前

20XX年

俺はアメリカ合衆国海軍の士官用軍服並びに士官用制帽を着用し正装でこの場を訪れていた。

「月日が流れるのは本当に早いわね」

ヴィアも言い

「ああ、本当にな。つい昨日のようにまだ思えるよ」

そこから離れた場所には消滅したラクーンシティ後がある。SEAL時代に衛星写真を見た事があつたがほぼクレーターが出来上がっているのが分かる。

「10万人以上が一瞬にして消えたのよね……」

ヴィアは言いラクーンシティの方を見る。俺も彼女同様に向き直り、共に景色を見た。一生脳裏から離れる事はないだろう。一企業の悪事が罪なき大勢の人命を奪いそして拳句の果てが燃料気化爆弾を搭載した巡航ミサイルを10発撃ち込みそしてトド

メが戦術核を使うと言うとんでもないやり方で幕を閉じた。だが、あの地獄の場所には最後まで己の仕事を・・・任務を遂行しようとした治安維持の最後の砦・・・R. P. D. 警官達もいたのだ。脳裏から離れる事はない」

「何年経つてもやりきれないよ」

俺は言い犠牲者の名が刻まれた慰霊碑に行き

「クストツ」

思わず苦笑してしまい

「どうしたのユウキ？」

ヴィアに言われ

「ここを見てみる」

指をさすと

Y U U K I I C H I N O S E

A G E 1 8

刻まれており

「本当に俺は死人扱いなんだなって思ってた」

ヴィアに言い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィアは俺の方に手を置き

「大丈夫、私が付いてる・チームの皆がいる。チームは家族だよ」

ヴィアは言ってくれる。ふと気付く

「これ……」

俺はそれを拾う。ラミネート加工された写真だった。

「り……六花……みんな……」

写真には俺と六花が高校二年時の修学旅行に行った時の写真が置かれており写真の裏には

「You, re being loved for life by Rikka」

その言葉は俺の心に……心臓に突き刺さった

「つう~~~~~~~~」

ヴィアも写真を見て

「生涯……貴方を……愛しています……六花」

もう下手をすれば生きては互いに会う事はないだろう同級生の皆や六花。俺が生きている事がバレればとんでもない国際問題になる。だが、俺は既に戸籍が存在しない。存在しない人間なのだ。仮に日本政府が特例として戸籍の復活を承認しても俺が生きる場所はおそらくは日本に無いだろう。あの平和ボケした国では……。

「大丈夫？」

ヴィアは言い俺は写真を置き

「ああ、一ノ瀬優希としての在りし日の青春の思い出として此処に置いていくよ、俺はもう日本人じゃない」

写真を置き、そして

「エルビス・エルフィン」

「ジャック・エルフィン」

ヴィアとアリサの両親の名が刻まれた所に移動し

「お父さん、お母さん今まで此処に来れなくてごめんねそれから気にもなってると思うから紹介するわ、ユウキ・アルジエント海軍少佐、SEAL所属で私の同僚よ」

ヴィアが言い俺はただ無言で親子のやり取りを聞いていた。そして俺はヴィアから離れもう一つの慰霊碑に来ていた。そこはラクーン市警察の殉職者の名前がつづられた石碑だった無論洋館事件で殉職したS・T・A・R・S。隊員の名前も刻まれている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

石碑一つ一つに触れ、俺を助けてくれた警官の人達そして

「マービン・ブラナー」

その名を見つける

「マービン、見てるか？俺今アメリカ人だぜあんたと同じ、それと見てくれれば分かるが海軍士官だ見てくれ似合わねえ海軍の軍服姿だろ？」

俺は語りかけた。俺の知らぬうちにヴィアが隣に戻ってきており

「いいえ、マービン警視もきつとお似合いだと言ってると思いますよ」

ヴィアは言い、俺は

スツ

海軍式の敬礼を慰霊碑に捧げた、海軍兵学校で何度も叩き込まれた敬礼を捧げた、治安維持と国防は違わないと俺は思っている。だからここには先輩達が眠っているのだと思いつつ敬礼する。横を見るとヴィアもすつと敬礼をしていた。

「〜今度こそ絶対に守って見せます・・・絶対に!!」

俺は思いつつ敬礼を辞めた。そしてその後には俺達は予約入っていたホテルにチェツクインする。そして言葉を失った。ヴィアの奴俺とダブルベットの部屋を借りていたのだ

「なにか問題でも？」

ヴィアはしれつと言うが

「いいや、何も言うまい」

俺は言い

バスルームに行き私服に着替える部屋に戻るとヴィアも私服に着替えている

「ほんとにヴィア、お前服何着ても似合うよな」

俺は言い

「ありがとう」

ヴィアは言い二人でホテルの窓から夜景を見る

「綺麗な夜景だよな」

俺は言い

「うん、でももしまたアウトブレイクが起きたらと思うとゾツとするでもそうならないようにするのが私達の・・ユウキや私レオンにクラウザーそれにインテントの仕事だもの今はまだ組織が小さくともいわずれ大きな花を咲かせる時が必ず来る。」

ヴィアはいう。俺もそうだと思ってる。今はまだ「ホワイトハウス直属のエージェント」に過ぎないがいずれ時代は「対バイオテロリズム」の時代が来る。その時頼れるのは「地獄を経験し生還した人間」だという事だ」

俺は思ってる

「でもさ、今だけは・・このままで居させて」

ヴィアは言い俺にそつと寄りかかってくるのだった。

「
．．．．．
俺も何も言わずヴィアを頭を撫でていたのだった。
」

微妙な関係の二人、周りの視線

証言1

レオン・S・ケネデー 元警官 現ホワイトハウス直属捜査官

Q1 アルジエント捜査官とFOSのエルフィン捜査官の関係について？

A 「うーん．．．難しいな、ユウキとはかれこれ結構な付き合いだけでも浮ついた話は一回も聞いた事ないし、ラクーンの時はまだ高校生だったからな。正直機密かつ特殊な仕事だしね忙しすぎてあまりそういう余裕がないのでないかと思ってる。ヴィアとの関係は一言で言えば「友達以上恋人未満」と言った所かな？」

Q2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「ヴィアは見ればわかるけどあれは好意を持つてる。ラクーンを脱出した後の足取りは俺もユウキもわからない。互いに軍の士官としていろんな戦地に言ったりFBIやCIA等幅広い場所で働いていたし色々あったからでも個人的にはあの二人の組み合わせは合ってると思うし幸せになって貰いたいとも思ってる」

証言2

イント・ヴァレン 元US S 隊員 現ホワイトハウス直屬捜査官

Q 1 アルジェント捜査官とF O S のエルフィン捜査官の関係について？

A 「随分と難しい質問カマしてくれるな、正直相棒とは（本章参照）での出会いだからあの二人の事はそこまで詳しくはないけどもユウキとは非番の時や休暇が被る時とかは一緒に飲み屋に行ったり泊まりで何処かに出かけたりとあるけどもあまり浮ついた話はやはり酒の席でも聞かないし、個人的にはユウキの事自体がまずおかしいでしょ国の最高機密の一つに指定されているんだからさ。でも元アンブレラ所屬の人間を受け入れてくれて感謝してる、だからこそ相棒には人として幸せを掴んで欲しい。俺が言えた義理ではないのかもしれないが。」

Q 2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「俺は一度しか作戦に関わったことないからわからないけどもとても個人的にも動向を追っていたような感じだったしかなり深い感情を抱いているとも思えたかな？」

証言3

ジャック・クラウザー 元米陸軍特殊作戦軍 現ホワイトハウス直屬捜査官

Q 1 アルジェント捜査官とF O S のエルフィン捜査官の関係について？

「俺は兵隊だそういう他人の「惚れた」「惚れない」とかはちよつとイマイチわからん、俺

が言える事はユウキは日本に帰らずに米国に残った事は正解だという事だ。軍人としての能力は超一流だ、あの年で大したものだ。日本に帰ったら自衛隊と言う国防組織があるのはわかっていたが今のような優秀な能力を果たして発揮できたか否か

Q 2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「正直わからん、勘弁してくれ」

証言 4

ビリー・コーエン 元米海兵隊員 現ホワイトハウス直属捜査官

Q 1 アルジェント捜査官とFOSのエルフィン捜査官の関係について？

「正直一度しか会ったことがないから俺がどうこう言えるようなものではないと思うけどもうーん・・・微妙な関係」だね「友達以上恋人未満」なのかあの悲劇の事件の生還者だからかなのか「傷の舐め合い」なのか本当の「答え」は二人が見つけるしかないと思うけどね」

Q 2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「正直な所何とも言えない、でも普通の人と比べるとかなり親密な関係に見えなくもないかな」

証言5

イグリッド・ハニガン 元不明 現FOSサポート要員

Q1 アルジェント捜査官とFOSのエルフィン捜査官の関係について？

「正直見ているかなりヤキモキしますね、あの子は感情を押し殺しているのでしょうか。でも私も女ですから、でもアルジェント捜査官がどう思っているか微妙かもしれません。でもあの二人ははずれ「答え」を出す時が訪れる事になると思います。どんな結末になっても。」

Q2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「それは私の口から言わなくともお分かりになるでしょう？」

周りではこのような回答になった。ではエルフィン捜査官の唯一の肉親である彼女に伺ってみよう。

証言6

アリサ・エルフィン

Q1 アルジェント捜査官とFOSのエルフィン捜査官の関係について？

「正直言つて、見ててハラハラしますねユウキさんと姉が今同じ職場で働いていますが正直何とも言えないような関係ですねどっちも。なにか決定的なのごとでもあれば変

わるのでしょうけども」

Q2 ヴィアはユウキをどう思ってる？

「姉さんは間違いなくユウキさんに好意を寄せていると断言出来ます。正直私もそう遠くない未来に「お義兄さん」と呼びたいな〜と思っていますし」

周りではそう思われてるそうな・・・

ヴィアの想い

夕食をとり

「ふう・・・美味かった」

俺は言い

「ええ、本当に美味しかったわね」

ヴィアも言った。

「さてと」

時計を見ればまだ余裕がある。

「ふう、先にシャワー浴びてくるわね」

ヴィアは言いシャワールームに行き、途中で振り返り

「ユウキ、我慢できなかつたら覗いてもいいわよ?」

ウインクするヴィアに

「はいはい、そんな不義理は働きませんからお好きな時間だけシャワー浴びてくれ」

俺は言った。そんな俺の返事にヴィアは

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

複雑そうな顔をしてシャワールームに入っていった。

ヴァイスデール

シャワーを浴びながら先の言葉を思い出す

「You're being loved for life by Rikka」

「生涯貴方を愛しています 六花」、この言葉は私にも突き刺さっていた。写真のユウキは高校二年生の時の顔だったが彼は笑っていた。後で聞いたらあの写真は修学旅行の二日目に海で撮影した写真だとユウキは言っていた。でも問題はそこじゃない、私はあの悲劇の一夜を共にし、今こうしてユウキとは共に命を預けるような間柄になったそれでも「あの写真のような笑顔」を私は一度も……いいえ他の誰のメンバーも見た事がない

「私には……「本当の笑顔」を向けてはくれないの？」

ぼそつと呟いた。再会してからのユウキはいつも無理しているのがよくわかる。本当は日本に帰りたいても帰ることはもう叶わない。そしてさっきの写真を見た時の動揺ぶり

「六花さん……私は貴方が羨ましい……本当に」

誰にもいないひとりの空間で言った。六花さんの強い想いは同じ女である私も痛い程に理解できる。もう二度と会う事は叶わない相手を思うと言う事は。ただただシャ

ワアの音が室内に流れる音が響くのだった。

ヴィア side アウト

ヴィアがそんな事を思っているとは全く知らずに俺は

「ふう．．．うまい」

一人ワインを飲んでいた。

「(酒は嫌な事を忘れさせてくれる．．．か)」

飲み仲間のインテントが言っていたが全くその通りだと思う。今日あそこを訪れた事により再確認できた。日本人としての俺は既に死んでいると言う事を。

「死人に口なしか．．．フツ．．．何が自由の国だ、チクシヨウが」

俺は言っていた。毎年米国政府から俺の育った施設には名義を色々と変えて寄付金を送っているとアダム・ベンフォードから聞いた。確かに俺が政府の裏側に属する条件としてつけたがまさかまだ律儀にやっているとは俺も思わなかった。そんな事を思っている

「ふう〜いい湯だったわよ」

ヴィアがあシャワーを終えてきたようだが、なんとまあバスタオルを体に巻いたままと言う男には刺激の強い格好で出てきた。しかし俺はとある所に目があった。

「ん??.」

ヴィアは俺の目をおい自分の太ももに來ているのを見ると

「もう、貴方が気にする事じゃないでしょ?」

彼女は言い

「後ろ向いてて、着替えるからさ」

俺は後ろをむき

ヴィアは着替える。

「いいわよ」

言い振り返るが

「ぶっ」

思わず吹いてしまう、それもその筈ヴィアは上半身は着替えているが下半身はパンツ一枚と言うきわどい格好をしているからだ。

「なんでもイイからズボン着ろズボン」

俺は言うが

「ユウキ、この傷そんなに気になる?」

ヴィアは隣に座り言い

「いや・・・えつと・・・その」

俺はいいよどもむが

「ごめんね、刺激が強すぎたかな」

言い彼女はズボンを履く。そして

「あつ、ズルい一人でワインなんて飲んだの？」

彼女は言い

「そう怒るなつて、お前の分もある」

俺は一本取り出しコルク栓を抜きヴィアのワイングラスに注ぎそしたら

「ユウキも」

彼女が俺のワイングラスに注ぎ

「ありがとう」

俺は言い彼女とワイングラス軽く当てる

「この夜景に」

ヴィアが言い

「二人の夜に・・・なんちやつて」

俺は言い

カチンッ

軽くグラスを当て

「もう、雰囲気台無しよ？、せつかくイイセリフ言ってくれたのに」

ヴィアは言いつつも互いにワインを飲み

「ほんとに時が流れるのは早いね、ワインを嗜む年になるなんて・・・」

ヴィアは言い

「ホントだな・・・」

俺もワインを飲みながら答えた。その後、幾分か時間が流れた後俺はシャワーを浴び戻る。

「さて、ベッドは使えよ俺はソファで寝る」

言う

「いいじゃない今更なんだし。一緒のベッドで一夜を共にした中じゃない」

ヴィアは言い

「・・・」

俺は少し無言になり

「そうだな・・・今更だな」

答え、二人でダブルベッドに潜り酒がいい仕事をしてくれたのかすんなりと眠気はやってきたのだった。

V i a s i d e 2

傷ついた心

「はあ．．．．．」

目を覚ます、横には幸せそうに眠るヴィアが居る。

「．．．．．」

そつと握る手をほどかしゆつくりと起こさないように布団をかけてあげる。

「良い夢を．．．」

そう言いつつベットから離れ

「夜空が綺麗だな．．．．．」

窓から外の景色を見る。やはり海の向こう．．．祖国日本を連想してしまう。

「皆．．．．．」

親友達、クラスメートの顔を連想する。皆どうしているだろうか

「孤独．．．．．か」

此処に一緒に持ってきているUSP 40 タクティカルを取り出す

「．．．．．」

弾倉から40S&W弾を一発外し

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銃弾を見つめる、その時俺の中に邪な考えが浮かぶ

「(この銃弾を脳天に撃ち込めば・・・この苦痛から解放されるのかな・・・)」

そんな考えが俺の脳裏に浮かんでいた。そして銃弾を手の平で弄びつつ考え込んで
いると

「ダメッ」

声が響き振り返る間もなくベットで寝ていたはずのヴィアが素早く俺の手からU
Pの弾倉と40S&W弾をかすめ取っていく。そして

「何考えてるの?!」

ヴィアにどやされる。

「え?!」

俺はとぼけ

「えっ?!」

ヴィアも両手にUSPの弾倉と40S&W弾を握りつつ困惑し

「SEALの時から癖でな、不安な時とかはこういう風に銃器を弄る癖があるんだ。
人は裏切る事があるかもしれないが、銃は武器は裏切らない居なくならないからな」

ヴィアの手から弾倉と40S&W弾を回収し弾倉に詰め込み

カチャッ

本体に弾倉を装填する。

「俺が自分で自分の頭を吹っ飛ばすとも思ったか？」

苦笑しつつ言う

「……………うん……………」

ヴィアは言い

「信用ないな……………俺」

言う

「当たり前だよ、ユウキ時たま情緒不安定なんじゃないかって心配になる時もあるもの」

彼女に言われるが

「自殺するくらいなら当の昔に頭をぶち抜くなり首吊るなりしちまってるよ」

俺はヴィアに言い銃に安全装置をかけてホルスターに入れる。

「……………」

ジトつと俺を見る彼女の眼は

「信用ないな……………俺……………」

眩き

銃を置き

「俺はこの制服に袖を通す時に誓った。あらゆる脅威から周りの人達を守るとそれを反故にして自分かつてにこの世から退場すると思うか？」

言いベツトに再び横になり

「孤独からは逃げられない・・・か」

眩き

「ユウキ何か言った？」

ヴィアが言ったが

「いや何も」

俺は答えた。そして眠気は直ぐにやってきた

ヴィア side

「ユウキ・・・」

さっきの独り言を私は聞いている「孤独からは逃げられない」と言う事を。何とかしてあげたいけどもどうする事も出来ない、このジレンマは歯がゆい物があったのだった。

本編 {一時凍結}

エージェントVS巨人

「なんだ此処」

ボートから降りた俺達は銃に付けたライトを照らし進むと

「ウエルカム!!」

声を掛けられ

「なんだ、あんたか驚かすなよ」

俺は言い

「危うく撃つところだったぞ」

クラウザーが言い

「イイ「ブツ」はあるか？」

レオンが聞き

「おいそれやばい物の取引に聞こえるな」

インテントが苦笑しつつ言い

「これはどうだ？旧式のボルトアクションだが威力は保証するぞヒヒヒヒあとはこいつ

だマシンピストルだ。だがまあ、アサルトライフルを持つてるストレインジャーらには余計なはなしかなヒヒヒ」

武器商人は言いスナイパーライフルを進めてくる

「ふむ……」

俺は考え込む。SEALでもセミオートが主流になりつつあるが、それは市街地戦や予測のつかない接近戦になる場合の話だ。だがじっくりと狙うならばボルトアクションのほうが優れ威力も高い上にセミオートのようにデリケートではない分ちよいと乱暴に扱っても簡単には壊れはしない

「よし、そいつくれ」

俺は言い

「その他に何が入用だ？」

聞かれ

「弾薬一式、後こいつの弾200発くらい」

俺は金を払い武器と弾薬を受け取る。

「サーブिसでスコープを最新のものに変えておいたぞヒヒ」

全員がそれぞれ弾薬を補充し後にしようとした時

「待った待ったストレインジャー」

武器商人に言われ

「まだ何かあるのか？」

尋ねると

「ああ、ストレインジャーらの持つ武器を改造してやるサービスもあるぜヒヒヒヒ」

言い皆で顔を見合わせ

「例えば？」

俺が聞くと

「ストレインジャーの持つてるDE50、見た所かなり手を入れてあるようだがマグナムと言えば威力だ、つまりは威力の上昇や連射性などを向上させるサービスだヒヒ」

「「「・・・・・・・・・・」」」

互いに顔を見合わせ

「分かったこの「Mk25」と「DE50」と「M1100」と「スナイパーライフル」をできる限り改造してくれ」

俺は自身の武器をそのままM4除き全て渡した。

「お得意様サービスだ通常料金の90%オフで仕上げてやるよヒヒヒヒ」

そう言い、レオンにクラウザーにインテントを見る。

「次の機会に」

レオンが言い

「同じく」

クラウザーも言い

「同じく」

インテントも言った。

そしてお金を払い武器を受け取る

「全部最高の出来にしあげといたぜ、次もよろしくなストレインジャーヒビ」

武器をホルスターに収め

「じゃあ、どうもさん」

俺達と言い梯子を上り外に出ると、見知った光景が広がった

「此処……」

「戻ってきた……のか」

「なるほどなあ……よくできてる」

「ふう……先に進もうや」

そうして元来た道に戻ろうと進むと

バタンツ

扉が閉ざされ

「「しまった」」

俺達はそれぞれ武器を取る、目のまえでは村人たちが大きな扉から何かを引つ張り出そうとしているかのように綱を引いている。

「cjdjgw@お」

「!!ヴおkd!!」

相変わらず何を言ってるかわからないだが出てきた「物」を見て

「イツ!!」

「なんだ・・・ありやあ・・・」

「巨人かよ」

「でけえ」

四者四用に言う中巨人は怒り狂ってるのだろう自分を引きずり出した村人を踏みつぶしその強靱な腕で殴り殺しと虐殺の限りを尽くすそして次の獲物に俺達を捉えたようだ

「散れッ」

レオンの一声で皆がその場から散りそのコンマ秒後にはそこをあの強靱な腕がかすり通る

「マズイ、あんなのまともに喰らえば即死だッ」

レオンは言いつつもハンドガンを撃ち

「怯むなッ、撃て撃ち続ける」

クラウザーがM4を乱射する

「こんなデカブツ初めてだ」

インテントもM1100オートを撃ち込む

出し惜しみはせずに俺もライトニング・ホークの50AE弾を叩きこむが

「「え・・・?!」」

俺が一発放ったその銃弾が大きなダメージを与え巨人はもがき苦しみだし背中が割けその中から寄生体が姿を現す

「ユウキ、あいつを撃てツアレが本体だ!!」

レオンが言い

「了ッ」

照準を合わせ引き金を引き絞る発射された銃弾が寄生体に命中しはじけ飛ぶ。だが「こつちに倒れこんでくるぞッ!!」

クラウザー

が叫びさらに皆で飛びのく大きな音を立て巨人は倒れこむ

「ふう・・・危なかった・・・しかしそのライトニングホークの威力けた違いじゃないか

「？」

レオンは言い

「確かに、改造してもらってから威力は絶大な物になってやがる」

クラウザーも言い

「全くだ、相棒俺も次の処で改造してもらおうわ」

インテントも言い

「俺自身驚いてるよ。」

言い

「まあなにせよ先に進もう」

俺達は元来た道に戻りそして急ぎ教会へと向かった。

ターゲット確保

教会正門

「よし、気張っていくぞ」

俺は言い、門にエンブレムをはめ込む。

ガチャン

音がし、施錠が解錠された音がし

スツ

コクン

コクン

コクン

ハンドサインで合図をだし、レオン・インテント・クラウドザーが準備し、勢いよくドアを開け、突入するが……

「……」

教会内部はもの家の空だった。

「さてはてどこを探します?」

インテントは言い

「隠し通路的な物でもあるのか？」

クラウザーは言い

「よし、周囲の搜索だ、怪しい所があれば報告を」

レオンが指示を出し

「オーケー」

俺達はそれぞれ、散会し周囲の散策を行う。そんな中、俺は2階に上り、進もうとするが

「だめだ・・・柵が降りてる。」

柵が降りており、行く手を阻まれる。インカムで

「イント、どうだ？」

相棒に聞き

「いやダメだ、ユウキ特にこれと言って怪しい所はない」

イントの声が無線を経由し聞こえ、周りを見渡すと

「.....!」

シャンデリアを挟み、反対側に何らかの装置があるのが視界に入り

「レオン、なんか見つけた。状況の打開につながるんじゃないかと思われる。」

報告を入れ、皆が2階に集まる、だが

「左側の道を策が降りてて進めない上に奥にあればあると言う事は・・・」
クラウザーは考え、俺は

「このシャンデリアを伝っていくしかないようだな・・・」

俺は言い

「重すぎる奴はダメだな・・・」

レオンは言い

「この中で一番体重の軽い奴が行くしかないだろ」

インテントは言い

「じゃあ、此処は小柄な俺の出番だな」

俺は言うのと、インテントに

「悪い、俺の装備品頼む」

伝え、シャンデリアに飛び乗り

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

3人が見守る中

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タイミングを計り、反対側へと飛び移る、そして機械のスイッチを押し

教会の宗教のエンブレムのようなものが真ん中に浮かびその周りの投射されている物を回し組み合わせて1つのエンブレムに合成する様で

「.....」

投射されている光景を見て、数回程回転させ合成ボタンを押す。するとうまく行ったように、封鎖されていた柵が上がり、俺は皆と合流し

「ナイス、ユウキ」

「ナイスだぜ、NAVY SEALs」

「流石、相棒」

3人と合流し、ドアの前で突入態勢を取り

「GO」

レオンの合図で室内に突入する俺達だったが出迎えてくれたものは

「アブねッ」

先頭の俺が直ぐにしゃがみ背後のインテントに木材の切れ端が当たる

「アウチッ」

鼻を押えのたうち回るインテントを他所に

「こっちに来ないで!!」

中にいる女の子が銃を持つ俺達にも警戒心丸出しにしているが、レオンが

「落ち着け、俺達は大統領の命令で君を救出に来たんだ」

言うとは

「え、私のお父さんが」

ターゲットは言い、俺は

「一応念の為だが、アシユリー・グラハムだな」

確認を取り

「え．．．ええ、そうよ」

彼女、アシユリーは言い

「ふう．．．」

クラウザーが一息つき

「おいおい、俺の事は無視かよ．．．ひでえよお．．．鼻血を垂らしながらインテントが起き上がろうとする中

「あ．．．ごめんなさい．．．」

アシユリーはインテントに謝る。しかし

「あ、コイツ大丈夫だから気にしないで」

俺は言い

「ああ、ほらいつまで昼寝決め込んでやがる、さっさと起きろ、レンジャー」

クラウザーがどやしつけ

「理不尽・・・」

インテントは言いつつも意気上がり、俺は治療を施してやるのだった。俺はレオンより端末を借り、作戦本部に連絡を入れ

「ヴィア、ターゲットを確保した。繰り返しターゲットを無事に確保した」

報告し

「了解よ、迎えのへりを急ぎ行かせるわ、座標は追って指示するわ」

「了解」

端末を切り

「さっさとここを離れよう」

俺達はその後にさっさと教会を出ようとしたが

「その子を返してもらおうか、ミスター」

背後から声をかけられ

「！！！！」

俺達はすぐさまアシュリーを守るようにの声の主に銃口を向ける。

「貴様、何者だッ」

Mk25の銃口を向けつつ、一歩前に出て俺が言う

「私の名はオスムンド・サドラー、この教会のカリスマ」

サドラーと名乗ったそいつは言い

「目的はなんだ、ロリコン野郎」

インテントが言い

「我力を世に示す事だ、アメリカは宣伝するには丁度いいアメリカ大統領の娘を拉致し
「我らの力」を与え、そして返す」

それに

「ま・・・まさか」

アシユリーは何か思い当たる節があるように言い

「皆、私首に何かされたわ・・・」

アシユリーは首を押えながら言い

「アシユリーに何をしたッ！」

レオンが怒鳴り

「その子には種を植え付けた。父親の元へ帰つたらさぞかし世間にはぎわうだろう。だがその前に、少しばかり交渉しお布施をしてもらう、教団の運営にも何かと金がかかるものでね」

サドラーは紋章を見ながら言い

「信仰か金かどっちかにしたらどうだ」

クラウザーが言うも

「君達2人も同じ種を植え付けた事を忘れる所だった」

サドラーは笑いながら言い、レオンとクラウザーは

「チツ、あの時か」

「クソッ」

2人とも悪態を付く中

「君達に植え付けた種は特別でね、植え付けた卵が孵化すれば、私の意のままに行動する。」

言い

「どうかね、この革新的布教のやり方は？」

言うと同時に

背後のドアが開きボウガンを持った信者らが入って来る

「………ツ」

俺達はすぐさま走り出しその脇を信者のボウガンの矢が何本も壁に刺さり、それと同時刻に左腕に焼けるような痛みを感じたがなりふり構わず走り、教会の窓を突き破りそのまま飛び降りる俺達だった。

「痛ってえ．．．全くイカレてるぜ．．．リーダー」

インテントが言い

「エキサイティングだな、全く」

クラウザーが言い

「全くな．．．」

言う中

「ツおおお」

俺は左腕を見るとボーガンの矢が突き刺さっていた。

「全く、こんな飛び道具までとはな．．．」

「「ユウキツ」」

3人はあれこれとメディカルキットを出そうとするが

「大丈夫だつて」

俺は言い、ボウガンの矢を引き抜き

「おまつ」

レオンは言う中

「イント、9mm弾くれ」

「あ・・・ああ」

バラ弾を貫い、弾頭部分を外し中の火薬を傷口にあてがい

「レオン、ライター」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でレオンはライターを差し出し

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ!!!」

キズ口に火をあてがうと火薬に着火し傷が焼かれ傷口が塞がる

「良い子は真似すんなよ?」

アシユリーを見て言うが

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

顔面蒼白だった。直ぐに傷口を確認し

「よし、傷はふさがった」

言いパットとあてがいテーピングテープでぐるぐる巻きにし一行は教会を急ぎ後にするのだった。

サンドイッチのハム

教会でターゲットのアシユリーグラハムを救出し脱出した俺達はその後、村で襲い来る村人たちをハチの巣にしつつ村を何とか離脱するが・・・

???

「ユウキ、聞こえる?」

「ヴィアからの通信に

「こちら、アルジェントどうぞ」

俺は返答し

「悪いニュースよ」

言われ

「悪いニュースはききたくはないかな・・・」

俺は言うも

「先程、貴方達を回収に向かったヘリが何者かに撃墜されたわ。」

その悪いニュースに

「内通者の仕業か……」

俺は言い

「ええ、こちらとしても内通者がわからない以上動きようがないわ。でも何とか次のへりを極秘に手配するってハニガン先輩が言ってるわ」

ヴィアは言い

「了解、通信終了」

俺は通信を切り

「どうした、相棒」

インテントが言い

「悪いニュースだとき、ヴィアからで」

言い

「どう言う事だ？」

レオンが言い

「俺達を回収しに来るはずだったヘリが撃墜されたと」

言い

「情報が洩れてるな……」

クラウザーは言い

「いや、恐らくは内通者の仕業だろう。まさか極秘作戦の本作戦にまで潜り込んだのか・・・」

レオンは言い

「とにかく、前に進むしかない」

インテントが言い、俺達は前進を余儀なくされた。

そこに

「まっつたぜ、ストレインジャー」

安定の武器商人が現れ

「毎度ながらに神出鬼没だな」

言い

「まあいいや、弾くれ弾」

それぞれが弾薬を購入し

「これはおまけだけ、ストレインジャー」

俺は武器商人に手榴弾と焼夷手榴弾に閃光手榴弾を各10発づつもらい

「恩に着るよ」

言い

「備えあれば憂いなしだぜ、ストレインジャーヒヒヒヒ」

相変わらず不気味だが補充できる物資を補充し、道なりに進んでいくと吊橋があり俺達が橋を渡る途中に小屋が見え

「一息つきたいわ」

アシュリーが言った時

「……………！、マズイ…………」

後ろの方の俺達が来た方角がやたらと明るく見え軍用複合双眼鏡を覗いていた俺は言
い

「どうした？」

レオンは言い、

「後方、敵接近！」

言い、今度は

「前方もだ!!」

インテントが言い

「マズイ!!あの小屋に入ろう!!」

慌てて、小屋の中に入ると

「レオンッ」

声と同時に棒切れが飛んできて受け取ると、そこにはレオンと一緒にいた男が居ただ。だ。

「彼女が大統領の娘さんか、スタイルいいじゃないか」

言っている

「失礼ね」

アシュリーが言い返し

「そんな事いつてる場合か」

クラウザーが言い、俺とインテントで家具を動かしバリケードを組み、レオンは窓にて状況を確認し

「数が多い……」

言う中

「成る程ね、オーケー、ゲームの時間だ!!」

その男、ルイスは言い

「アシュリー、2階に隠れてろ」

俺は言うアシュリーが2階に行き、俺達はそれぞれに配置につき

「ショータイムの時間だ」

俺はM4に持ち替え

「ああ、ハンティングの時間だ」

「インテントもM1100の持ち替え

「軍人の血が煮えたぎる」

「クラウザーもMk23ソーコムの弾倉を確認し

「泣けるぜ……」

レオンもUSPを構え戦闘に備える。そこからは、ひたすらに銃撃戦となった。四方から村人が押し寄せ、室内は銃声と薬莖のオンパレードになった。

「畜生、次から次へと」

「悪態を付きながら俺はボルトストップしたM4の弾倉の交換をし

「危ない、ユウキッ」

「弾倉交換の無防備な隙に俺に襲い掛かる村人をインテントのM1100が火を噴き村人をミンチにする

「助かった相棒！」

「素早く弾倉の交換を終えまた、窓の外から中に入ってこようとする村人を射殺する。

「全くキリがない!!」

「レオンは言い

「南米を思い出すよなあ、レオン」

クラウザーも過去の任務の事を引き合いに出しつつ村人に容赦なく鉛弾を御馳走するそして、どれくらい銃撃戦を展開していたか分からないが、

「！」

「村人が・・・帰ってく・・・」

「ようやくか・・・」

「さつき弾買ったばかりで弾切れすんぜんだぜ・・・」

「ふう・・・一難去つてだな」

俺達や、ルイスは言い

「あんた、どうするんだこれから」

俺は言い

「忘れ物を取って来る、先に進んでてくれ」

ルイスは言う就先に行ってしまった。そこに

「ユウキ、「さつきの事」だが、話してくれてもいいんじゃないか？」

レオンに言われ、

「水臭いぜ相棒、あんな超人的能力」

インテントもM1100に弾薬を装填しつつ言い

「そうだが、俺達はチームだ。隠し事はなしだ」

クラウザーもMk23の弾倉を交換しつつ言い、俺は先ほどの事を皆に言い始めるのだった。

怪しげな古城へ

「ユウキ!!」

皆が待つ場所に俺は戻ってきた。先ほど入手した書類に「村の最終防衛線」と記載された書類があり、そこに「村長」が俺達を待ち構えていると記載されており、俺が単独で乗り込み「村長」をボコつてきたのだ

「やけに速いな、あのバケモノどうやってボコつてきた?」

クラウザーに聞かれ

「コイツ」で「永遠」におねんねしてもらったよ」

俺はライトニング・ホークを指し

「2発でおねんねしてたからもう大丈夫だ」

言うと

「あゝあ、お気の毒」

インテントが言い

「さてはて、進むしかないわな……それはそうとあの開かずのドアのカギなんか持ってたか?」

レオンは言い

「カギ……と言うか……」

俺は言葉を濁し

「これな……」

とあるものを皆の前に出す

「おいおいおい」

「おま?!やる事イカレてる!!」

「マジか……」

「キヤーーーーーツ」

皆は驚き、アシユリーは悲鳴を上げるそれもそのはずだ、ぱつと見それはどう見ても人の眼球にしか見えないからだ。だが

「よく見ろ!!」

俺は言い、インテントが確認すると

「……!コイツ義眼だ。」

インテントは言い

「(。D。)ハア?」

クラウザーはアホずらを晒し

「本当か」

レオンは言う。

「ブツを確認した後、俺達はそのまま、開かずの門を義眼で開城し先に進むが、まあこれがいカレっぷりが半端ではなく、更には

「トラックが突っ込んでくるぞ!!」

レオンが叫び

「任せろ!!」

「インテントがどこぞで入手したと突っ込みたかったがRPG-7でトラック事村人を消し炭にしちまい

「あくあ、またつまらないものを吹っ飛ばしてしまった・・・」

RPG-7に次弾を装填するインテントに

「おいおい、お前何処でそんな物騒な物を見つけたんだ!!」

バックブラストの煙でむせこみ、俺は半ギレになりつつも聞くと

「いや、お前が村長ボコってる間に武器商人になんかいい武器ない? って聞いたらしいところがあるって」

インテントは言い

「値段は?」

聞くと

「1000000Pstだったけども、交渉と言う名の脅迫で3000000Pstに負けさせた。無論支払いはUSDollでだけでも」

しれつと言い

「相棒……」

俺があきれる中

「アレは傑作だったぞ、武器商人の野郎インテントの野郎に銃口に突っ込まれちまっつよ、焦りまくるわでな」

クラウザーが言い

「まあ、話はさておき、先に進もう」

レオンが言い

「でも、武器商人さん気の毒ですね、大損だもの100万PSTが30万PSTじゃあ俺達は先に進み、ハイ後からまたしても村人が追いかけてきた為、やむなく古城の中に入り橋を上げたこれで完全にまた退路を断つことになっちまったのだ。そして

「ウエルカム、ストレイインジャー、ヒヒヒヒ同業者をおどしたってのはアンタかいヒヒ」
インテントを見て笑い

「ああ、そうみたいだなうちの連れが悪い事をした」

俺は言い

「ヒヒヒヒ、気にしてないぜストレインジャー、見てくか??」

聞かれ

「武器はなんか良いものは入った?」

聞き

「LS-9セミオートライフルとM1014カスタムセミオートショットガン、後は武器の改造だな。」

言われ

「どうする?」

皆に聞き

「ショットガンのセミオートは持つてるが、ライフルのセミオートは魅力的だな」

周りが言う中

「そうそう、お得意様のストレインジャーにはコイツをプレゼントだ」

武器商人はそう言う俺に一丁の銃を渡す。

「ハード・ボーラー」かノーマルスライドモデルでロングスライドモデルじゃないタイプか」

俺は言い

「二応、新型の45口径のマグナムだぜ、ストレインジャー」

言われ

「これ欲しかったんだよね、ありがとう。さっそくこいつの改造も頼んでイイか？あと
はこいつ用の45口径のマグナム弾も、手持ちが50AEだから」

聞き

「もちろんだ、ストレインジャーヒヒヒヒヒヒヒヒ」

改造と弾薬を大量に補充し

「お、クラウザーとレオンはそれ買ったのか」

俺は言い

「ああ、いつまでもお前におんぶや抱っこじゃ不味いからな」

言い2人はLS-9スナイパーライフルをチョイスしていたのだった。

「狙撃支援はまかせたよ」

俺は言い

「ああ、任せろよ」

2人は言い、古城の奥に進むのだった。村がまともじゃなければこの古城もまともではないだろうと感じつつ俺達は進むのだった。

やっぱりこもイカレてた!

古城

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

物陰から隠れつつ、軍用複合双眼鏡で確認する

「どうだユウキ」

クラウザーが言い

「真っ黒なフードを被った何とも不審者のな奴がうろついてるな、人数は4人」

俺は言い

「武装はしてるか?、村でさえあんなに住民がイカレてたんだ」

インテントが横から言い

「ちよつと待て・・・・・・・・」

再度軍用複合双眼鏡をのぞき込み

「・・・・・・・・鎖カンマをもってやがる・・・・・・・・」

俺は答え

「やっぱりと言うか・・・・・・・・何というか・・・・・・・・此処もイカレてたか」

クラウザーは言い

「さてはて、切り込むか!!」

俺は、先ほど武器商人から貰ったばかりのハードボラーのマガジンを確認し

「よし相棒!!、そう来なくちやな!!」

インテントも言いM9片手に言い

「ユウキ、インテント俺達は此処から支援する!!」

レオンは言い

「よし、任せろ特殊作戦軍で鍛えた狙撃の腕を見せてやる」

クラウザーとレオンが言い

「撃ち漏らしたら頼む!よし、相棒行くぞ」

俺達はそのまゝ物陰から出て通路に行く

★○×◇~~~~!!」

また意味の解らない事を行っているフードを被った四人組が俺達に気付き襲ってくるが

「少しばかりおねんねしてくれ」

俺は言い、ハードボラーの引き金を引く。発射された45口径マグナム弾は標的を貫通して2体を射殺し

「雑魚に45口径マグナムは勿体ないぞ」

インテントもフードを被った不審者を始末する、その先に進もうとした時に
「○×◇△~~~~~!!!」

い意味不明な単語と共に投石器から炎に包まれた岩が飛んでくる。

「ヤバいな、」

「ああ、さつさと行かないといけないのに!!」

俺とインテントは装填の間を付き、階段を一気に駆け上がり古城の二階部分に行き

「投石器が二つにフード野郎がそれぞれ2人ずつか」

インテントは言い

「狙撃で片付けるか?」

ボルトアクションライフを取り出そうとする俺を制して

「いや、「コイツ」でしょ」

インテントは言うな否や、またもやRPG-7を取り出し

「不審者は排除じゃ!!!」

発射されたロケット弾は投石器事周りにいる奴らを吹っ飛ばす。

「よし、次!!」

再度ロケット弾を装填しなおしもう一か所にもぶちかましあつという間に投石器陣

地を破壊する。

「す……スナイパーライフルの存在意義は……」

俺が言う中

「そんなもん、爆殺するか、狙撃で射殺するかの違いじゃないか。気にすんなよ細かい所は」

そうして、レオン達と合流したが

「このご立派な城門どうする？」

「いや、素直にこんちわく出入れてくれるとは思えないが」

「破壊できそうなものは……」

「……」

アシユリーを含めた4人の視線がインテントに集まり

「……おっけい、1つ派手にぶっ壊しますか!!」

インテントは再度RPG-7を城門に構え

「ちよつと待て!!」

慌てて城門から離れて

「発射!!」

ロケット弾で城門も綺麗に破壊し中に進むと

「ゲホゲホゲほ、やる事がド派手だな、ストレイインジャー!!」
むせこむ武器商人がいた

「ストレイインジャー、みてくか……」

「「「いや今回はパスで」」」

俺達は武器商人をスルーして城内に侵入するのだった。城内で

「やつと追いついた!!」

ルイスが俺達と合流し

「ハアハア、」

ばて気味だったが

「お前らに渡すものがあるんだ」

ルイスは言い

「なんだ?」

俺は言い

「この中で「首に注射」を打たれた奴は居るか?」

ルイスは俺達に尋ね

「ええ」

「ああ」

「奴らにやられた」

アシユリーとレオンそしてクラウドザーが言い

「お前たちは」

俺とインテントに尋ねるも

「いや、俺達は大丈夫だ」

「ああ」

俺とインテントは言い

「そうか、ちょうど薬が3人分しかなかったからな」

アシユリーとレオンとクラウドザーとそれぞれに薬を渡し

「こいつは一体何なんだ？」

俺が尋ねると

「この薬は注射によって植え付けられた寄生体の成長を阻害する薬だ。完全に成長しきってしまう前に取り除かないといけないが、幾分か時間が稼げる。」

ルイスは言い

「お前、本当に元警官か？」

レオンは言い

「……………」

俺はそつとホルスターに手を伸ばす中

「ああ、正直に話すよ」

ルイスは話だす。自身が研究員だった事、それとこの寄生体関連の研究にも携わって
いた事など

「「……………」」

俺達は黙つて話を聞き、俺は

「さっきの薬のレシピはあるのか？」

聞き

「ああ、(こ)……………あれ?!

ポケットをまさぐりまくるルイスだがその肝心の薬のレシピが見当たらないよう
で……………ヤバイ……………此処に来る途中で奴らに追われて落とされたかも」

言い

「此処からは二手に分かれよう」

レオンが言い

「ああ、賛成だ」

俺も頷き

「ユウキ、インテント、2人はこのハンサムぶーの警護を頼む。彼しかこの村で起きた事

の真相を知る者はいない」

レオンは言い

「その・・・いい・・・のか？」

ルイスはレオンに言い

「お前に死なれたら俺達も時間の問題だ、薬の予備をお願いしたい」

レオンは言い

「わ・・・わかった」

ルイスは頷き

「心配するな、二人とも現役の特殊部隊所属の腕利きだ。お前を完璧に奴らから守って見せるさ」

レオンは言い

「プレッシャーかけるなよ」

「リーダー、それはキツイわ」

俺とインテントは言い

「俺とレオンはVIPと先に進む、迷子になるなよ？」

クラウザーはニカッと笑い

「ああ、迷子になりそうになったら無線機で助けでも呼ぶさ」

俺は皮肉を言い

「しつかりやれよSEALS」

クラウザーが俺に言い

「ハイハイ」

俺達は言い

「それじゃあ行こうか？ハンサムぶーさん」

俺はルイスに言い

「分かった、二人ともついて来てくれ、抜け道や隠し通路を知ってる」
俺達は二手に分かれて行動するのだった。

ハンサムぶーの隠れ家

「はいはい、次、次、そんなに慌てない」

ズドンズドン

「汚物は徹底消毒じゃあ!!」

ドカー——ンッ

ルイスと共に元来た道を引き返し、運よく落とされた抗寄生体薬のレシピを発見し、ルイスの隠れ家に急ぐ中、マグナムやRPG-7でハチの巣や粉々にされる邪教徒らを見てルイスは

「これじゃあ、どつちが悪党か分からねえ」

言ってるが

「それで、お前さんの隠れ家は何処よ何処」

マガジンを交換しつつ俺は言い

「レシピも回収できたし早くお前さんの隠れ家に急ごう。」

RPG-7に次弾を装填するインテントも言い

「解ってる、此処までくればもうすぐそこなんだ」

俺達は迫りくる邪教徒らを片っ端から射殺・爆殺しルイスの隠れ家を目指すそして
「此処だ」

何も無い壁の所まで来て

「何もないぞ」

「おいおい大丈夫なのか？」

俺とインテントが言う中

「よつと」

壁に手を当てると

ガチャンツ

音が鳴ると壁が動き入り口が現れる。

「わぁお」

「すげえ……」

まさに秘密基地とはこの事を指すと感心してると

「さ、見つからないうちに速く入ってくれ」

ルイスは俺達に促し俺達も後に続き、隠れ家に入るのだった。中に入ると

「これは……」

研究の資料の山で

「此処にある資料は全部研究で使った資料だ。この寄生体通称「プラーガ」の事が書いてある。」

渡され、読むと大まかには

体内でふ化した寄生体は宿主の神経系統に寄生しやがてはその全てを乗っ取ってしまふ事、対処方法は投薬によるふ化前に寄生体の排除、もしくは寄生体の成長を阻害させる抗寄生体薬を服用し外科手術で摘出、最終手段は専門機器を使用。

と記されており

「この専門機器は何処にあるんだ？」

聞くと

「残念ながら此処じゃあない、孤島にまで行かないといけない。だからレオン達をそれまで持たせるためにこの抗寄生体薬が必要になるんだ」

ルイスは言い

「で、その薬は大丈夫なのか？」

インテントは言い

「ああ、効き目自体は強力で、人体には無害だが寄生体には強く作用し成長を阻害する。」

薬の説明をルイスはし

「成る程な。安心した」

インテントも言い

「念のためだ、2人もこれを持っててくれ」

棚を開けて中からレオン達に渡した抗寄生体薬を俺とインテントにも渡し

「言い忘れたが、こいつは卵がふ化する前に服用すれば寄生体事始末できる。お守りと思つてな」

ルイスは言い

「よし、抗寄生体薬はこれで全部だ」

ルイスは棚の中の抗寄生体薬を全てテーブルに出して言い

「後はこれだ」

研究の資料を俺達に渡し

「万が一にも俺の身に何かあったら、この書類と抗寄生体薬をお前さん所の組織の上層部に提出してくれ!!」

サンプルとして抗寄生体薬を1瓶と研究資料の書類を厳重に保管しシヨルダーポーチに入れ

「万が一と言ったが、それはない。俺とインテントで必ずこのイカレた場所からお前を連れ帰る。」

肩に手を置き俺はルイスに言い

「確かに、俺と相棒は此れよりも遥かに地獄の状況から幾度となく生還してるからなま
だかわいいモノさ、これ程度の状況なら」

インテントは言い

「これ以上?!」

訝しむルイスを他所に

「ああ、これ以上の状況だ」

俺は言うのだった。そんなおり無線が鳴り

「ハイ、アルジエント」

出ると

「すまん、アシユリーと分断されてしまった。反対側に向かう道を今見つけてそつちに
向かってる」

レオンから報告が入り

「了解、きいつけろよ」

俺は言い

「そつちもな」

レオンが言うのだった。無線を切り

「何だって?」

インテントが言い

「ああ、トラブルでアシユリーと分断されちゃったとさ」

俺は言い

「まじかあ……」

俺達が言ってる

「2人にもう一つ協力してほしい事があるんだが……いいか」

ルイスに言われ

「なんだ？」

俺達は言う

「研究のサンプルがあるんだが、それを奪取して奴らの計画そのものを頓挫させたいんだ」

言われ

「……」

顔を見合わせ

「弱者を助けて、悪党をシバキ倒すのが俺達の仕事だからな」

俺は言い

「ああ、やろう」

俺とインテントも言い

「2人とも恩に着る」

ルイスは言うのだった。

番外編

ゲスト対談1 ユウキ&インテント

駄「ハイハイ今回はゲスト談話です。今回のゲストはこのお二人」

ユウキ・アルジエントさん

イント・ヴァレンさん

駄「さあ談話ですが、あれ・・・お二人とも？」

ユウ「いやあ、結構今までハードな事をさせられてきたんで作者にも復讐しようかと」
イン「全くだ、相棒には同情もするしそもそも設定も大概だ!!そもそも俺はこの作品に出張しに来てるしな。」

駄「まあまあ、そこはほら二次小説ですから気にしたら負けですよ、それにインテントさんの出張を許可して下さった作者様にもこの場をお借りしてお礼申し上げますありがとうございます!!」

ユウ「それはそうと、俺は何時故郷に帰れるんだ？」

駄「予定としては、おっと、ネタバレはダメですね、近いうちと言っておきます」

イン「まあた曖昧な事ばかり言っていると、読者にめられるぞ」

駄「まあまあ、実はその話にはイントさんにも同行してもらいたいと思います」

イン「はあ?!」

ユウ「それマジかよ」

駄「ハイ、マジと書いて本気ですから」

イン&ユ「ダメだこりゃあ」

駄「話は変わりますが、このバイオハザード4編ですが長すぎるので所々端折る事にしました」

ユウ「やつぱり・・・」

イン「そうなんじゃないかと思ってた。」「村長」の出番をカットした時あたりから」

駄「仕方がありません、それにアルジエントさんを始めとす主要人物も重武装ですからこういつては何ですが、村長との戦闘シーンで話を作るのは無理だろと思ひましてですのぞ」

イン「さつき「村長」見かけたけどもスタッフに抗議してたぞ、「俺の出番」!」って」
ユウ「気の毒過ぎる。出番がカットされた上に「マグナム2発」でおねんねとか」

駄「仕方がありませんよ、原作通りに進めてませんからね。既に皆さん共に初期装備から強力な武器を装備してますから、彼では太刀打ちできませんよ」

ユウ&イン「{ひでえ}」

駄 「ユウキさんには日本に任務で赴いた話の際には修羅場になるかもしれませんがよ」

ユウ 「おれ一応被害者な、そこ忘れんなよ作者」

イン 「ああ、そこ忘れたらダメ!!」

駄 「まあでもアルジエントさんには「彼女」からのピンタの1発2発くらいは覚悟なさった方が良くもしれませんね、話の内容的に。」

ユウ 「オワタ・・・」

イン 「ひでえ」

ユウ 「でもまあ、ギヤラ貰ってやってるわけだしギヤラ分の仕事はきっちりするよ」

イン 「俺も同じく。」

駄 「ではお二人とも、引き続きよろしくお願い致します。今回はユウキ・アルジエントさんとイント・ヴァレンさんでした!」

現在の主要人物の装備

今現在の登場人物の主要装備

ユウキ・アルジエント

〔ハンドガン〕

サムライ・エッジA1（外見はクリス仕様ベース）

Mk25〔SIG P226〕

〔ショットガン〕

M1100セミオートショットガン

〔スナイパーライフル〕

ボルトアクション式スナイパーライフル（スプリングフィールド M1903A4）

〔アサルトライフル〕

M4A1アサルトライフル

〔マグナム〕

ライトニング・ホーク 50AE（デザート・イーグル）

ハードボーラー 45口径 (フォーマルスライドモデル)

イント・ヴァレン

「ハンドガン」

USP45

M9A1

「ショットガン」

M1100セミオートショットガン

「アサルトライフル」

M4A1アサルトライフル

「スペシャル・ウエポン」

RPG-7 (∞) ↑武器商人を脅迫し100万Pstを30万Pstに無理矢理値引きさせた。

レオン・S・ケネディー

「ハンドガン」

VP70M

U
S
P

「ショットガン」

M1100セミオートショットガン

「スナイパーライフル」

セミオート・スナイパーライフルLS—9

「アサルトライフル」

M4A1アサルトライフル

ジャック・クラウザー

「ハンドガン」

Mk23 ソーコム

「ショットガン」

M1100セミオートショットガン

「スナイパーライフル」

セミオート・スナイパーライフルLS—9

「アサルトライフル」

M4A1アサルトライフル

ヴァイア・エルフィン

「ハンドガン」

M9A1

今の所こんな感じになっています。駄作者が忘れてしまっただけで登場していない武器等あるかと思うので遠慮なくバンバンご指摘下さい。

役者の皆様のご反応

ユウ「やたら俺だけ重装備なんだけど・・・」

レ「まだいいじゃないか、インテントなんぞチート兵器を脅迫して買いやがった」

ク「ああ、あれは思い出しただけでも笑えるがな、むしろあいつにもう任せても良いんじゃないか？」

イン「ロケット・ランチャーは男のロマンでしょ!!」

ヴァイ「いやねえ、序盤からいきなりチート兵器はちよつと・・・」

ユウ「俺もヴァイアに同感、ギリギリの状況に命を賭けるのが精鋭の証だと思うが」

イン「相棒、まさかの裏切り?！」

ヴィ「と言うか私はそもそも戦闘職種じゃないんですから拳銃だけですよ作者さん」
駄「今ん所はこの状況だけでも今後武器は増えてくだろうし選択は広がるかな」
ユウ「じゃあ俺、シカ○タ○プ○イ○ー欲しい!!」

ク「さつきインテントの事否定してたくせにお前もチート兵器欲しいのかよ?！」

ユウ「∞は男のロマン!!」

イン「お前も人の事いえねえじゃねえか!!」

駄「それでは皆様、次話でお会いしましょう!!」

ユウキ・インテント・レオン・クラウザー・ヴィア

「「「「あーちよー」」」」

ゲスト対談2

○○○

はい、今回もやってきましたゲスト対談です。今回のゲストはこの方

「おい、駄作者！なんで儂の出番が立ったの数行でかたずけられとるんだ!!」

皆さんおなじみの村長事「ビトレス・メンデス」さんです

駄「お疲れさまでした、ユウキさんとのコンバットは如何でしたか？」

ビ「どうもこうもあるか!!、いきなりマグナム使ってくるのか反則じゃろうが!!」

駄「まあまあアレはしゃーないですって、原作とは違うんですから」

ビ「原作ブレイクし過ぎじゃ！馬鹿者」

駄「そうはいつでも既にライトニング・ホーク持つてつてる時点で私はある程度は予想が付きましたけれども」

ビ「だから最初から初期装備にマグナムはなしじゃろうが普通に考えても」

駄「うーん、まあ駄作者自身原作ファーストプレイ時には散々てこづりましたからね」

ビ「だからと言って、老体にいきなりマグナムはなからうて」

駄「まあ、イイじゃないですか、あまり苦しむことなくぽっくりと逝けたんですから」

ビ「あまりにも不遇すぎじゃ!!」

駄「そう言われても、困りましたね。」

ビ「話の修正をワシは要求する!! あんなあつけなく50AE弾2発お見舞いされて終わりなんて悲しすぎる、孫に笑わてしまうわい。」

駄「「おじいちゃん弱い!!」とてもですか?」

ビ「おい、若いのおちよくるな!!」

駄「落ちていて下さい、血管切れてしまいますよ」

ビ「はあはあはあ、いかんのお・・・直ぐにかつとなつてしまうわい」

少し休憩中〜Now loading〜Now loading〜

駄「少しは落ち着かれましたか?」

ビ「ふう、いきかえるわい」

駄「えつと、どこまで離されましたっけか・・・」

ビ「ワシのちゃんとした出番を修正して要求すると言っているんじゃ!!」

駄「それは出来ない相談ですね。」

ビ「なんでじゃ?!」

駄「只単に労力を割くのが面倒な所とどう足掻いても貴方が秒殺されないようにするのが無理だからですよ」

ビ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

駄「例えばユウキ以外ですと、レオンとインテントクラウドー問いますがどのエージェントと戦つても確実に負けますよ？それも秒で」

ビ「やってみなけりやわからん!!」

駄「いいえ、貴方の敗因率100%ですよ」

ビ「なんでじゃ!!」

駄「例えばですが、インテントは既にRPGー7(∞)を持つてますからやはり2発で昇天確定ですし、クラウドーでも強力な45口径のハンドガンやオートショットガンにアサルトライフルレオンも同様にしかりです。貴方が何処まで踏ん張つても結局の所「秒殺」されるのでカットと言う事になります」

ビ「(^ ω ^) ・・・・・・・・」 ↑開いた口がふさがらない。

駄「おーい、大丈夫ですか?」

ビ「そこを何とかお願いじゃ、負けるのが分かかっていても僕には行かないといけない時があるんじゃない!!」

駄「えつと、そうそうユウキさんより言伝です」

ビ「何じゃ?!」

駄「「あまり、ガタガタ抜かすと撮影用の空砲じゃなく実包の50A E弾で物理的に昇天させてやろうか?」です」

ビ「我まま言つてすまんのじゃ」

駄「解つていただけて助かります。では今日のゲスト「ビトレス・メンデス」さんでした。」

断章4

駄作者とメンバーの緊急会議

某会議室

「BIOHAZARD（悲劇のエージェント）」作者並びにメインキャスト御一行様

会議室には

レオン・S・ケネディー

ユウキ・アルジエント

イント・ヴァレン

ジャック・クラウザー

ビリー・コーエン

ヴィア・エルフィン

の6人と駄作者が集まっていた。

駄「今日は集まって貰ってありがとうございます」

レ「いや俺達も昨今の新型のウィルスのお陰で撮影がね・・・」

ユ「確かに、迂闊に外に出て誰か一人でも菌貰ったらアウトだからね」

ク「だか流石にそろそろ撮影を進めんと不味いだろう」

駄「そうなんだよね、俺もそう思っではいるんだけど」

ビ「おれなんてまだ出番が殆どない、作者が逃亡したのかと思っただけだわ」

ヴィ「それ言うなら私も殆ど出番らしい出番なんてナシですよ」

駄「それに関しては申し訳ないよ本当に」

イ「だがよお、現状は余り芳しくないだろう」

作者と役者らは言い合うち

駄「注目!!」

レククビヴィイ「なんだ？」

作者の一言に皆が見て言う中

駄「今現在の「バイオハザード4編」に関してなのだが現状を持って「一時凍結」しようと思っっている」

レ「?!」

ユ「なして？」

イ「なんと」

ク「まあ」

ヴィ「へ?!」

ビ「Oh……」

役者らは言う中

「理由としては話が長すぎて何処をどう端折るべきか追っつかない事と今後も考えて
だ」

イ「作者、質問」

駄「ハイ。イントさん」

イ「一時凍結＝作者逃亡という訳ではないよな、確認したいんだが」

ユ「それな、俺も思った」

駄「それはない、言い方が悪すぎたすまない。一時凍結とは言っても実質は話が先に
進むだけだ。NEXT・STORYにね」

レ「と言う事は……」

ク「そう言う事か……解ったぞ」

ビ「成る程な……」

ヴィ「どいういう意味ですか!!」

ユ「だから一旦この『バイオ4編』を凍結して先に話を進めてある程度バイオ4編で話がまとまったらこつちも追記するという形を取るつもりだろう、作者さん?」

駄「その通り」

ヴィ「回りくどい事しますね」

ビ「確かに。」

駄「そうでもしないと考えられないし何時までも停滞させるのも宜しくないからさ」

ク「ふむ……」

駄「ちなみに次のストーリーでのメインはユウキ&ヴィア&インテントになる予定です」

ユ「俺?」

ヴィ「私?」

イ「俺と相棒?」

駄「そ、次の話は時系列からは完全はなれたストーリーの予定だからね、それに一応ユウキに至っては1つの決断を迫られる所でもある予定だよ」

ユ「決断?」

駄「そう、決断だよ。それでは次のストーリーから話に絡むキャストの皆さんどうぞ

お入りください」

六「失礼しまゝす、近藤六花入ります！」

広「広本2等陸尉入ります」

高「高本3等陸尉入ります」

駄「次の話から追加のキャストさんです」

ユ「ゲツ！」

六「酷いよね．．．私今でも貴方の事想つてるのに．．．なのに、アメリカで別の女作つてるなんてさ．．．グシャ↑〔台本握り潰す音〕本編ではビンタ数発は覚悟してよね．．．」

ユ「おい．．．冗談．．．だろ．．．オワタ．．．」

広「俺が中尉に当たる2尉でお前さんが台本だと昇進して海軍中佐?! どんだけのキャラアエリートなんだよ．．．素直に再会を喜べないぞ」

高「全くですよ、生きていたならどうかこうにかして連絡下さいよ」

ユ「無理ゲーだつての!!」

六「あなたがヴィア・エルフィンさんね、優希は渡さないわよ!!」

ヴィ「その言葉そっくりそのままお返し致します。」

ユ「喧嘩しないでくれ!!」

六・ヴィ「優希（ユウキ）は黙ってて・下さい!!」
ユ「・・・ハイ・・・泣けるぜ・・・」

ポン↑ユウキの肩に手を置く音

レ「今日は飲もう、酒は嫌な事を忘れさせてくれる・・・」

駄「次回の舞台は日本の「床主」が舞台になります。もうこれはピンと来ているのではないでしょうか！ちなみに新章に入る前には番外が数話程続きます。」

レ・ク・ビ「ちよつと待った!!」

駄「何でしょう？」

レ・ク・ビ「俺達の出番は？」

駄「ありませんよ？（　　ω　　ω　　ω　　↑しれつと言う駄作者）」

レ・ク・ビ「（　　ω　　ω　　ω　　↑あんまりだあ!!!）」

会議室の中で騒がしく時間は過ぎて行くのだった。

それぞれのプライベート 1 レオン

ホワイトハウス

大統領執務室

「以上が報告になります、グラハム大統領閣下」

ミッシヨンのリーダー各だったレオンが報告書をグラハム大統領に渡す。

「苦勞」

グラハム大統領は言い受け取り

「ケネディー君はもう休暇の予定は決まったかね？」

グラハム大統領は尋ね

「骨休めと銃器に関して「ラクーン」の頃から知ってる最高のガンズミスに相談に行くと

頃です」

レオンは答え

「その他のメンバーはどうかね？」

言い

「ユウキの奴は任務の際に喪失した拳銃を新調しに顔なじみのガンズミスの所に行きま

した、ヴィアはユウキに付いて行つてゐる処です。インテントはクラウザーと泊りがけで飲みに行ききました。ビリーはオフィスで残りの仕事をしています。」

答え

「そうか………」

グラハム大統領は頷き

「チームの面々を労うつもりでファミリーパーティーに招待するつもりだったが無駄骨に終わったか」

笑いつつも言われ

「しかし片方は納得の組み合わせ、もう片方は意外な組み合わせだね」

グラハム大統領は言い

「と………言いますと?」

レオンは言い

「アルジェント捜査官とエルフィン捜査官の組み合わせは納得の組み合わせだよ。」

グラハム大統領は苦笑しつつ言い

「此処だけの話、このホワイトハウス直属のエージェントチームはバイオハザードから生還した人員で構成されてる。軍務経験者、元警察官、元工作員、元民間人と」

説明し

「確かに、私はたった一日だけの警察官生活でしたし、ユウキやヴィアは当時は高校生ですからね。インテントはアンブレラの作業員、クラウザーは元陸軍特殊作戦軍の隊員。ビリーは現役の海兵隊士官ですからね」

レオンは答える。

「ああ、官民間わず。そう考えるとまるで当時のラクーンの「S. T. A. R. S.」のようだなまるで」

グラハム大統領はコーヒーを飲みながら言い

「ラクーン市警特殊部隊ですか……」

レオンは苦笑する。

「ラクーンのある地獄から生還した君達の中で足取りを追うのが一番骨が折れたのはヴィア君ら姉妹だったようだね。」

「ヴィア達姉妹がですか?」

レオンは言い

「ああ、当時の情報部の人間が彼女に接触した際に危うく殺されかけたそうさ。相当気を張って生きていたのだろう」

「そうですか……」

2人は話し

「そして政府側に付いてくれと要求した時は「NO」の一点張りでもこちらとしても苦勞したようだね。当時の彼女の生活は裕福とは言えるものではなかったが彼女なりに頑張つてはいたようだね。」

話し

「そこで、当時の情報部の担当者は金銭面での援助を条件にしたがそれでも彼女は首を縦には降らなかつた。その次は妹さん共々身の安全の保障を付けてもだ」

それを聞き

「ヴィアらしい。政府の力を借りずとも家族は守つて見せる・・・か」

レオンは言い

「じゃあ結局は何が決め手になつてこつち側に付いたんですか？まさかとは思いますが妹さんを人質にしたとかじゃあ・・・」

聞くが

「いや、記録には「アルジェント捜査官」がこちら側に付いた事を言つたら彼女は考えを変え始めたようだね最終的に彼女が出した条件が「家族の身の安全の保障」そして後は記録上だと「妹さんの学費援助」だそうだ」

グラハム大統領は語り

「自分の事よりも家族の事ですか・・・」

レオンも頷き

「事実彼女はアカデミーで訓練を受けたが情報方面では並外れた才能を持っていた様だね。ハッキングやカウンタートハッキング等の能力が高く射撃能力もそこらの警官や軍人エージェントに比べても優れているという評価が出ていた。アカデミーを卒業後はFBIで数年勤務しFOSに移籍し今に至る」

グラハム大統領が語る中

「の二人はあの狂気の一夜を共に過ごしそして互いの命を預け合い並外れた信頼関係があります。最もヴィアのほうは好意を示しているのが解りますがね」

レオンは苦笑し

「私もそうじゃないかと思っていたんだ。でも彼女と彼が一緒になれば正真正銘の家族になる訳だし彼も「形だけのアメリカ人」でもなくなる。彼の精神的な支えにもなるしな諸君らの任務は最高難度の危険度の伴なう任務だ誰かの支えがなければ生きてなどいけんよ」

グラハム大統領は言い

「同意見です」

頷くのだった。それと共に

「そうだった、君に……いや正確には君とアルジェント捜査官に渡す者がある」

「??」

言われケースを二つ受け取り中を確認するために一つ開けるとそこには

「……これは……」

ケースの中には「海軍中佐」の階級章が鎮座していた。

「これからは国外派遣の可能性も高まる。もはやバイオテロは一国での問題では無くなるだろう。多国籍で協力しなければならぬ時が来るだろう。」

言われ更に

「軍籍を持っている貴官とアルジエント捜査官への私からの「褒章」と思ってくれて構わない。私の大事な家族を救ってくれたのだからね、それと対外的な措置でもあるんだ中佐の階級を持つ高級士官ならば海外で活動する際にもそうそうぞんざいな扱いはされないだろうし不便はしないだろうからね」

グラハム大統領は言われ

「バカンスからアルジエント捜査官が戻ったら君からその「海軍中佐」の階級章を渡してやってくれ」

頼まれ

「ハイ、了解しました」

領くレオンに

「そうそう、気が変わったら何時でも私達家族のホームパーティーに来てくれたまえ」
グラハム大統領はレオンに言い

「ハイ、気が変われば」

苦笑しつつも答え、大統領執務室を後にするのだった。

それぞれのプライベート 2 ユウキ&ヴィア1

銃砲店「kendo」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

どよんとした空気が場を支配する。

「えつと・・・ロバード、ジヨウ、ゴメン」

俺は謝り

「あ・・あははは・・・・・任務上でこうなったんだもの致し方ないかあと私は思うんだけどどもね・・・・・・・・」

ヴィアも若干顔が引き攣ってしまっている。無理もない。専用のガンケースに収まっているMk25カスタムモデルは見るも無残な姿になっていたからだ。

ロバートは手袋を付け、部品を取ろうとしたが

「一応銃本体は洗浄しましたよ。流石にね」

言い

「まあ念には念を入れてだな」

ジョウも同様に破損した部品を見る。

「スライドが腐食して解けかけてやがる……」

「信じられん……フレームもだ……」

「兄貴、コイツはひでえよ。此処まで壊れるのは……」

2人は言いつつ

「で、どうする？ユウキ」

聞かれ

「一応考えて居るには考えているんですが……」

俺は言い

「もったいぶらずに教えてよ!!」

ヴィアも参加し

「そうだな話を聞かせてくれ!!」

「ああ」

ジョウとロバートも頷き

「考えてるのが、Mk25かUSPの9mmタクティカルモデルはてまた両方をベースに

しつつ対腐食性を徹底的に高めかつ弾倉をロングマガジンに変更し9mmの威力の無さを装着数で強引にカバーし、アイアンサイトを加工してほしい暗闇でも遜色なく使えるように。」

言い

「……………」

2人は話しを聞き

「対腐食性を……………」

「徹底的に……………」

「9mm口径仕様はそのままにロングマガジン装備に変更かつサイトにも加工を施す」

ジョウとロバートにヴィアも言い

「何処までの範囲をカバーするんだ？銃内部の部品全てをか？弾倉も含めての全ての範囲か？」

ロバートに言われる。それに対し

「勿論、内部も弾倉も全部だ。」

答える。

「成る程な、イイ考えだな。ラクーンの時の経験や今までの経験が生きてるな。あの時のような「バイオハザード」が発生している特殊な条件下でも銃器に求められるモノは

三つある「汎用性」「確実性」「安定性」の三つだ」

ロバートに言われ

「ですよ。一時は40S&Wにしようかとも迷ったんですがラクーンの時を思いだして考えてみたんですけれども高威力の弾薬はあの時もほぼ見つけられなかったですもんね。しかしながら9mmでも弱点部位にある程度の弾数を叩き込めば状況の打開にはなりますからね。その分射撃の腕が要求されるのも痛い所ですが」

答え

「その部分に関してはお前さんは大丈夫だろう、所属こそホワイトハウス直轄のエージェントだが肩書は現役の海軍特殊部隊のメンバーの1人だからな」

ジョウにも言われる。

「となると選定機種はどっちにする?」

聞かれ

「両方でお願ひします」

答え

「Mk25とUSP9mmタクティカルモデルの両方か?!」

問われ

「です、手間をかけて申し訳ないのですが。メインアームはUSPで統一し予備の為に

Mk25も新調しカスタマイズをお願いします。後は、「コイツ」にも

もう一つガンケースを置きそれを開けたジヨウは

「コイツは「USP40タクティカル」モデルじゃねえか、幾分か使い込んでみたいだな。メンテナンスはしてるみたいだが、まあ俺達の方で見てもいいよ。部品の交換の必要もあるかもしれないしな。」

言われつつも

「お願いします。後はコイツにも同じ加工を施してほしいんです」

頼み

「となると……ロバート……」

「えっと、銃本体を全バラにしてコーティング用の特殊な薬液に部品を全部入れて対腐食性コーティングを施す作業を行い、後はサイトの加工だな。」

ロバートは簡単にメモを取り

「対腐食コーティング用の特殊溶剤は幸いにも在庫がある。Mk25もUSP9mmも在庫はある。怪しいのはロングマガジンだな。」

ロバートは言う

「分かった、ちよつと在庫確認してくる」

言うや否やジヨウが奥に一旦引込む。そしてその間に

「しかし、派手にぶっ壊したもんだな。」

残骸になつてゐるMk25を見てロボートは言い

「まさか銃を溶かすほどの溶液をぶっかけて来る奴が居るなんてな。」

「結構お金かけてチューンした銃が一瞬でアポンは泣けてくるよ流石にね」

ロボートと話し込んでると

・・・ツンツン・・・ツンツン

ヴィアが袖をつついており

「分かつてる」

ヴィアに言っている

「なんだなんだ？これから「お楽しみか？」」

ロボートが茶化すと

「まあ、そんな所です。「夜にゆっくりと」」

含みを持たせて言うもだから

「お前も隅におけねえなあ。」

言われてしまい

「違う違う、只のダイナード。ロボートが想像してる様な事はない」

全否定し

「むう……」

横でヴィアがむくれ

「はあ~~~~お前さん、鈍いつて言われた事ねえか？」

ロバートは頭を抱えて俺に言い

「いや」

答え

「嬢ちゃん、この朴念仁相手では苦勞するぞ？」

ロバートがヴィアに苦笑する中

「やっぱ、ダメだったわ。USP40のロングマガジンは在庫が6本あったけれども他は在庫切らしてる。注文しないと無いわ」

ジヨウは言い

「施工、組付け、調整、どれくらいかかる？」

尋ね、それにジヨウは

「銃自体はあるし、コーティング剤もあるから施工に関しては大丈夫だ。問題はロングマガジン事態を取り寄せになる事くらいか。」

言われ

「最悪次の任務までに間に合うようにしてくれればイイよ。当分は出番ナシだろうし

や」

答え

「となると、メインアームナシは不味いからな、その40をメンテナンスして後はそうだな・・・こつちには何日間いる？」

聞かれ

「休暇の間は居るつもりだ」

答えると

「分かった。メンテナンスと部品の状態を確認して必要なら部品の交換を行う。そし例の対腐食特殊コーティングを施して調整もしておく。君の癖は知ってるからね」

ジョウはメモを取りつつ言い

「分かった。二人の腕は信頼してるから全般を任せるよ。」

俺は言い

「費用に関してもお得意様だ、大幅に勉強させてもらおう」

「ありがとう」

言い、新たに2丁の銃を新調しそのままカスタマイズ作業を依頼し持参して来た銃を預けヴィアと2人で外に出るのだった。